

Indigenous Trade of Resources in the Northern Regions of North America : With a Special Focus on the Fur Trade and its Impacts on Aboriginal Societies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004077

北米北方地域における先住民による諸資源の交易について ——毛皮交易とその諸影響を中心に——

岸 上 伸 啓*

**Indigenous Trade of Resources in the Northern Regions of North America:
With a Special Focus on the Fur Trade and its Impacts on Aboriginal Societies**

Nobuhiro Kishigami

本論文の目的は、北米北方地域における交易活動について、1500年代から1870年代にかけて行われていた毛皮交易を中心にその全体像を素描することである。北米における毛皮資源の交易は、ヨーロッパと中国における毛皮需要や、イギリス、フランスなど西欧列強の政治的対立関係と連動しながら展開し、北米北方先住民を欧米の資本主義システムに接合させた。この過程で社会の崩壊、再編成を余儀なくさせられた先住民グループが存在した一方で、カナダ・イヌイット人やケベック・クリー人の大半は、毛皮交易に係わりつつもそのみに経済特化をせず、狩猟・漁労活動を維持してきたため、変化を被りながらも、拡大家族関係などいくつかの社会関係を再生産させることができた。毛皮交易への北米先住民の係わり方は一様ではなく、毛皮交易は先住民社会を破壊するという仮説は北米先住民社会のすべてに妥当するわけではない。

The aim of this paper is to provide a general picture of aboriginal trading activities, focusing on the fur trade from the 1500s to the 1870s, across the northern regions of North America, with special attention to the impacts of these activities on native societies. The fur trade in North America was historically developed in relation to commercial demand for furs in Europe and China, as well as to political conflicts among the Great Powers of Europe, especially between the British and the French. Native Americans were articulated into the European capitalist system through their participation in this commerce in furs. Although a

* 国立民族学博物館先端民族学研究部

Key Words : indigenous people of North America, northern regions, resources, fur trade, social change
キーワード : 北米先住民, 北方地域, 資源, 毛皮交易, 社会変化

majority of indigenous groups were forced to give up or reorganize their historically distinct ways of life during this fur trade period, many Inuit of Canada, as well as the Cree of Quebec have been able to maintain their subsistence activities and some sets of socio-economic relationships. This continuance comes from the fact that Inuit and Cree did not become economically dominated by the fur trade, but kept their systems of subsistence and kinship relations. As the responses to fur trading activities by the native peoples of North America were diverse, the general hypothesis that aboriginal involvement in commercial fur activities will inevitably result in the destruction of the participating societies does not apply to several cases of northern North America.

1 はじめに	5.2.1 大西洋沿岸における毛皮交易の開始(1497-1600年)
2 北米北方地域における先住民間交易と毛皮交易について	5.2.2 オタワ地域における毛皮交易(1600-1663年)
2.1 交易	5.2.3 五大湖およびハドソン湾における毛皮交易(1663-1713年)
2.2 ヨーロッパと中国の毛皮市場	5.2.4 サスカチュワンおよび北西地域への毛皮交易の拡大(1713-1763年)
2.2.1 ヨーロッパにおける毛皮市場と毛皮交易の展開	5.2.5 大西洋岸から太平洋岸への毛皮交易の拡大(1763-1821年)
2.2.2 中国における毛皮市場と毛皮交易の展開	5.2.6 ハドソン湾から太平洋岸への毛皮交易の拡大(1821-1869年)
3 アラスカ地域における交易	5.3 北米の亜極北地域における毛皮交易の諸影響
3.1 毛皮交易期以前	6 北米の中部および東部極北地域における交易
3.2 毛皮交易期	6.1 毛皮交易期以前
3.2.1 ロシア人による毛皮交易	6.2 毛皮交易期
3.2.2 ベーリング海峡交易	6.3 北米の中部および東部極北地域における毛皮交易の諸影響
3.2.3 捕鯨船との交易	7 北米北方地域における毛皮交易と先住民の社会変化
3.3 アラスカ地域における毛皮交易の諸影響	7.1 毛皮交易と社会変化
4 北米の北西海岸地域における交易	7.2 毛皮交易と先住民社会の階層化
4.1 毛皮交易期以前	8 結び
4.2 毛皮交易期	
4.2.1 海洋毛皮交易期	
4.2.2 内陸毛皮交易期	
4.3 北米北西海岸地域における毛皮交易の諸影響	
5 北米の亜極北地域における交易	
5.1 毛皮交易期以前	
5.2 毛皮交易期	

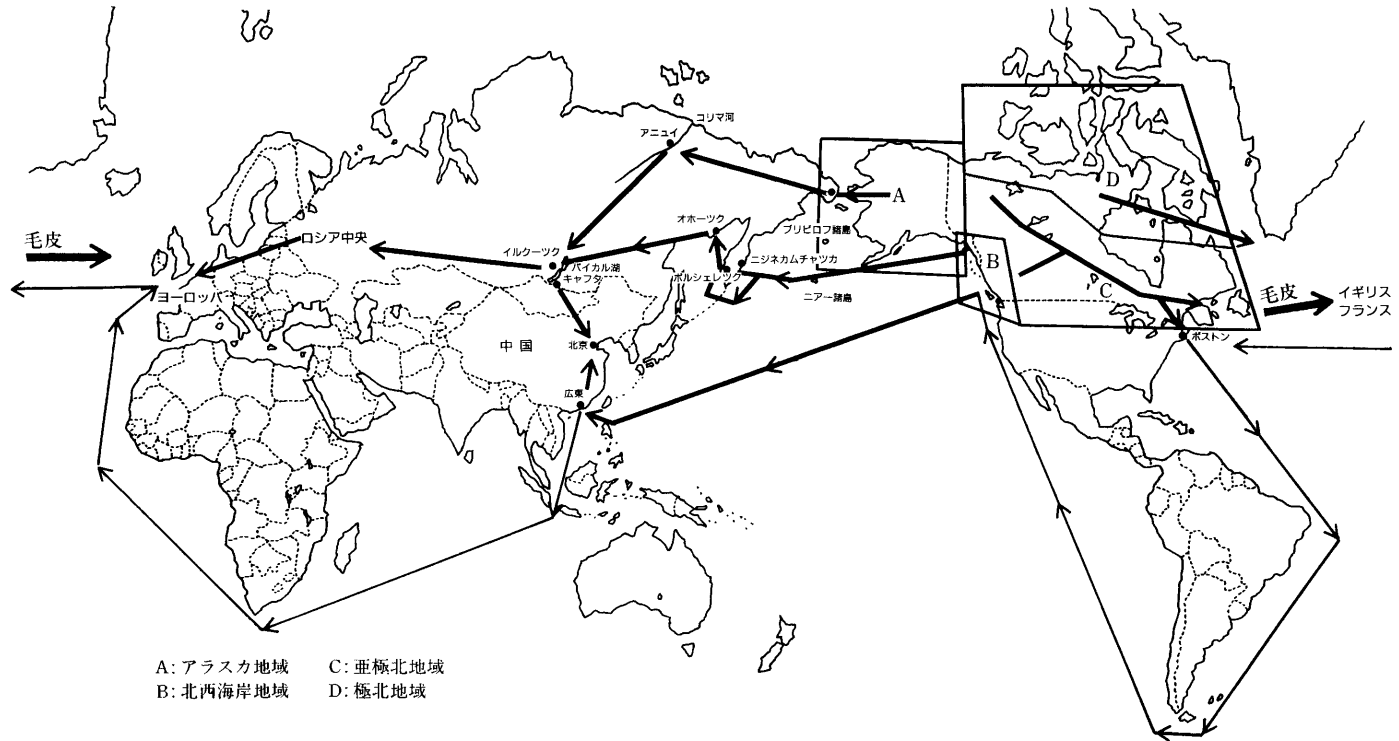
1 はじめに

北米先住民による諸資源の交易については、これまで特定の地域や民族集団ごとに多数の研究が出版されているが、北米の北方地域における交易の全体像を俯瞰するような研究は、筆者の知る限りほとんど存在していない（例外としては、Innis (1970); Wolf (1982: 158-194) などがある）。本稿は、北米の亜極北地域および極北地域におけるヨーロッパ人と接触前後の先住民間交易と、その後に展開された毛皮交易について16世紀から19世紀後半までの期間に焦点をあて、全貌を素描することを目的としている。さらに毛皮交易と先住民社会における階層化の関係など、毛皮交易が主要な原因と考えられる北米北方先住民の社会変化について若干の考察を加える。なお、本研究は、現地収集資料や歴史資料など第一次資料に基づくものではなく、既存の諸研究の成果を筆者が整理、総合したものであることを明記しておきたい。

北米大陸を東西に横断する現在のカナダとアメリカの国境付近から以北に住んでいた先住民は、16世紀以降、程度の差はあれ、毛皮交易に係わり、その交易が展開していく中で数世紀をかけて変容を遂げてきたと言える。ここでは、現在のカナダとアメリカの国境付近より以北を北米北方地域と総称する。生態環境や先住民が利用し得る動植物資源、交易を目的としたヨーロッパ人との接触の時期や様態の差異に基づけば、この北方地域は4つの下位地域へと分類することができる。それらの下位地域とは、アリューシャン列島を含むアラスカ地域（A 地域）、アメリカのアラスカ州の南部地域あたりからオレゴン州にかけての北西海岸地域（B 地域）、大西洋からロッキー山脈にかけて広がる亜極北地域（C 地域）、アラスカを除く、北米の極北地域（D 地域）である（地図1参照）。

本稿では、この4地域からなる地域軸と、毛皮交易期以前と以後という時間軸をかけ合わせて作った枠組みを利用して、だれとだれが、何をどのように交易したのか、毛皮交易が社会に及ぼした影響はどのようなものであったかについて、記述、分析を行う。

歴史家が北米における毛皮交易を取り扱う場合、イギリスや北米植民地の社会・経済史の一部として記述、分析することが多い（Trigger 1986; 下山 1990）。一方、文化人類学者やエスノヒストリアン（ethnohistorian）は、毛皮交易をヨーロッパ人と北米先住民の相互作用として捉え、先住民の視点や立場に力点をおいて記述したり、分析する傾向がある（岸上 1992, 1993）。しかも彼らは特定の先住民グループか特定



- (1) 北米北方地域→北米東部→ヨーロッパ
- (2) アラスカ中西部沿岸→チュクトカ半島→アヌイ交易所→イルクーツク
- (3) アラスカ南西部→カムチャツカ半島→オホーツク→イルクーツク
イルクーツク→モスクワもしくはイルクーツク→キャフタ→中国
- (4) ボストン→北米北西海岸→広東→ヨーロッパ→ボストン

地図1 毛皮交易のネットワーク

の地域に着目して毛皮交易が個々の社会に及ぼした諸影響を研究する傾向があり（例えば、Bishop 1974; Francis and Morantz 1983 など）、北米大陸の北方地域のような広域において展開されている毛皮交易を全体として把握しようとする研究はきわめて少ない。本稿では、北米北方地域の毛皮交易を欧米社会から来た毛皮交易者の活動に対する現地先住民の反応や相互作用として記述するという立場をとる。そして最終的には、北米北方地域における毛皮交易を、個々の先住民社会や地域の活動としてではなく、同地域全体で展開された活動として把握しようとする。

本稿は8節からなる。本節では研究の目的と記述の枠組み、論文の構成について述べる。第2節では交易の概念を定義し、ヨーロッパと中国の市場について概略し、北米において毛皮交易が盛んになった条件を記述する。そして、第3節ではアラスカ地域に、第4節では北米北西海岸地域に、第5節では北米の亜極北地域に、第6節では北米の中部・東部極北地域に焦点をあて、先住民間交易と毛皮交易の概略を記述し、かつ毛皮交易が先住民諸社会に及ぼした諸影響について要約する。第7節では毛皮交易が北米北方先住民にもたらした社会変化の多様性と階層化の問題について論じ、第8節では研究の成果を要約する。

なお、本稿で取り扱う各先住民社会の民族誌的情報については、“Handbook of American Indians”の第5巻『極北』（Damas, ed. 1984）、第6巻『亜極北』（Helm, ed. 1981）、第7巻『北西海岸』（Suttles, ed. 1990）、第15巻『北東』（Trigger, ed. 1978）で紹介されているので、ここでは省略することをお断りしておきたい。

2 北米北方地域における先住民間交易と毛皮交易について

2.1 交 易

資源とは、一般にある目的に利用されるもとなる物資や人材、情報、知識を意味する（岸上 1999: 64）。そして資源の有用性や経済的な価値は文化や地域、時代ごとに異なるという特徴がある（秋道 1997）。北米の生態系は地域によって異なり、そこに存在している動植物資源の分布にも多様性が見られる。はるかかたに存在する希少な財や有用な資源を所与の集団の成員が入手しようとするれば、そこに出かけて行って獲得するか、他の人が持っているものを入手するかのいずれかとなる。何らかの物や労働を提供することと引き替えに、必要とされる財や資源を入手したり、相手に渡すことは交換の一種である。交易は交換の一種であるが、一般的には「近代以前の商

業取引全般」を指すと考えられている（端 1987: 263）。本稿では、自らが属する社会とは異なる地域に住んでいたり、異なる社会に属する個人や集団を相手とする財や資源の等価的な交換（取引）を「交易」と定義しておきたい（cf. ボランニー 1980: 159; サーリンズ 1984: 286-330）。交易には、物々交換、沈黙交換、市場交換などさまざまな様式が存在している。

北米の諸先住民の間には、先住民間の物々交換に基づく資源の交易と、欧米人の毛皮商人（や先住民の仲介者）と先住民による毛皮とヨーロッパ製品の交易（物々交換であるが、貨幣に相当する尺度が利用された）が存在していた。前者を先住民間交易、後者を毛皮交易と呼んでおきたい。先住民間交易は一般的に先住民の間での物質的な要求を相互に満たすことを目的とする諸資源の交換であったのに対し、毛皮交易は先住民の物質的欲求を満たすのみならず、ヨーロッパや中国などの市場の需要を満たすための活動であった。

2.2 ヨーロッパと中国の毛皮市場

ヨーロッパにおいては、15世紀中頃以降、経済的な繁栄期が到来し、クロテンやテンの毛皮の需要が高まった。しかし15世紀後半から16世紀前半にはヨーロッパの毛皮資源が枯渇化したため、ロシア人はクロテンなどの毛皮を求めてシベリアを東進した¹⁾。また、1500年代からはビーバーなど新大陸の毛皮が交易によってヨーロッパに流入し始めた。

毛皮には、クロテン、ラッコ、ビーバー、ミンクなど高級毛皮衣類や帽子の材料にされるものから、小物や普段着、革ひもの材料となる牛革や鹿皮まで、かなりのバリエーションがある（寺田 1977）。北米の先住民が交易用にヨーロッパ人に提供した毛皮は、ビーバー、ラッコ、テン、ホッキョクキツネ、アシカ、アザラシ、クマ、カワウソ、オオカミ、クズリ、ヤマネコ、ミンク、アライグマ、オオシカ、ジャコウネズミ、キツネなどの毛皮であった。これらの毛皮獣は、北米大陸の亜極北地域の森林地帯、極北および亜極北地域の沿岸地域に多数生息しており、それらの商品としての毛皮の質はアメリカのオレゴン州やイリノイ州周辺で捕獲されるものよりカナダやアラスカ地域など北方地域で捕獲されるものの方が優れていた。18世紀後半には主要な毛皮市場は複数存在していたが（池谷 1999）、北米北方産の毛皮は主にヨーロッパと中国市場に出荷されていた。

北米北方地域における毛皮交易の展開は、ヨーロッパと中国における毛皮需要の動きと表裏一体の関係にあった。1492年にコロンブスが新大陸を発見して以来、イギリ

ス人、フランス人、スペイン人、オランダ人らの植民者が次々と大西洋を渡り北米の東海岸に流入してきた。17世紀末には、ビーバーなどの毛皮のヨーロッパ（特にロシア）市場への輸出は、イギリス人、フランス人、オランダ人らの北米北東部諸植民地の重要な収入源であった。北米東部における植民地の初期の発展（1682-1713年）は、イギリス、フランスへのビーバーの毛皮の輸出や、オランダ西インド会社を介して行われたビーバーの毛皮のロシアへの輸出に依存していた（Rich 1955）。北米大陸において農業・牧畜植民が進むにしたがい、毛皮交易の中心は北方地域（現在のアラスカやカナダ）に移り、ヨーロッパ人の毛皮商人が競合しながら西進していった。

一方、北米大陸の西側からはロシア人やアメリカ人が毛皮を求めて進出し、1800年頃には東西から別々に進出してきた毛皮交易が北米北西海岸地域で遭遇し、世界を1周する毛皮交易のネットワークが形成された（地図1参照）。北米の毛皮交易は、需要供給関係が常に変動するためリスクが大きいうえに大規模な資本を必要とする、新旧大陸間で行われた国際ビジネスであった（Kehoe 1992: 254）。ここでは、ヨーロッパと中国の毛皮市場の状況を概観する。

2.2.1 ヨーロッパにおける毛皮市場と毛皮交易の展開

1550年頃から1850年頃にかけて、ヨーロッパではビーバーの毛皮を用いたフェルト帽²⁾が大流行し、北米大陸におけるビーバーの毛皮交易が進展した。フランスにおいてはブルボン家のアンリ4世（在位1589-1610年）の頃に、毛皮製コートや手袋、ショール、ガウン、縁の広い帽子を着用するファッションが上流階級の間で流行し、毛皮の需要が拡大した（細川 1999a: 41）。イギリスでは、移住してきたスペイン人やオランダ人に帽子をかぶる習慣があったし、スチュアート王家とその家臣たち、清教徒も帽子を着用していた（Wolf 1982: 159）。北米から流入してきたビーバー毛（皮）と他の動物の毛皮やウール毛との混合技術が広まることによって、安価なビーバー・フェルト帽が市場に供給され、一般民衆も冬にはビーバー帽を被るようになった（下山 1990: 80）。この需要を満たすべく、1700年代にはイギリスのロンドンやグラスゴー、フランスのルーアンやトゥレーヌ、新大陸のニューヨークやボストン、ニューポートで製帽業が興隆した（下山 1990: 78-79）。ケベックに入植したフランス人、北米東部のイギリス人やオランダ人の植民地にとっては、毛皮の輸出は大きな収入源であった。次に述べるように、この帽子はさらにヨーロッパからアフリカや南米まで広大な経済ネットワークに沿って流通していった。

ビーバー毛皮の交易システムはきわめて複雑であった（Kehoe 1992: 253-254）。北

米大陸の東北地域に居住していたアルゴンキン語族系先住民はビーバーの毛皮7, 8枚から作られた毛皮服を着用していた。この毛皮服は先住民が1年くらい着用すると、身体から発せられる汗や脂によって柔らかくなった。この着古した衣服の毛皮は、castor gras ないしは coat beaver とヨーロッパ人によって呼ばれ、商品価値の最も高いものとされた。

ヨーロッパ人の交易者はそれらの毛皮を先住民から入手し、オランダ船によってフランスへ送った。当初、ロシアのみがビーバーの毛皮を処理し、短い内側の毛を取る加工技術を有していたので、それらはオランダの船でロシア北部の港へ運ばれた。採取されたビーバーの毛はオランダのアムステルダムに送り返される一方、毛皮自体はロシアにおいて外套を作る素材となった。

アムステルダムに送られたビーバー毛は、フランス（ルーアン、ツッレーヌ、ローショ、ポーリョウ）やイギリス（ロンドン、グラスゴー）のフェルト製造業者へ売却された。ビーバー・フェルトの需要が拡大するにつれて、フランス人のフェルト製造業者は、ビーバーの毛皮を加工のためにロシアへ送るのをやめ、独自で長毛を短い内側の毛にあわせて毛皮から切り取り、帽子や布地用のフェルトを製造するようになった。このため流通・加工のコストが低下した。カルヴィン派新教徒の職人がフランスからイギリスへ移住したため、フェルト帽の製造の中心地は1685年以降イギリスへ移行した。

フェルト帽は、イギリスやフランスにおいては、主に貴族層や富裕層の人々、スペインやオランダからの移民によって着用された。使い古された帽子は業者によって切り取られ、より小さな帽子に作り替えられ、スペインやブラジルの市場に輸出された。さらにスペインやブラジルにおいて使い古された帽子は、ポルトガル人によってアフリカへ運ばれ、売却された。このようにアメリカ産のビーバー毛はフェルト帽に姿を変え、ヨーロッパは言うに及ばず、南米やアフリカまで流通したのであった（Kehoe 1992: 254）³⁾。しかし、1840年代からヨーロッパにおいてはフェルト帽はシルクハットに取って代わられたために、ビーバーなど毛皮の需要にかげりが見え始め、北米の毛皮交易は衰退していった。

ヨーロッパや北米の富裕層の冬用外套や襟巻き、帽子など高級衣類として、北米産の各種の陸獣や海獣の毛皮は現在に至るまで利用され続けている。

2.2.2 中国における毛皮市場と毛皮交易の展開

中国では明の時代にクロテンの毛皮が流行したことが知られているが（河内

1971), それが宮廷において大流行したのは17世紀以降の清朝であった。清朝の宮廷においてクロテンは、「大体袖口や襟周り, 裾, 帽子などのポイント装飾に使われていた。しかも, 一定の官位以上でないと使えない。また, クロテンは禁制品であって, 国家がその取引を独占し, 宮中でのみ使用するのが建前であった」(佐々木 1996: 198)。しかし, キテン(黄貂)をはじめ毛皮は宮廷以外でも使用されるようになり, 人気を博した(佐々木 1996: 198)。そして後には, シベリア産のリス皮をはじめ, ラッコやオットセイなど北米産毛皮が中国で大量に消費されるようになった。

16世紀から17世紀はロシアにとって毛皮は莫大な国家の富の財源であり, 18世紀までロシアはヨーロッパとアジア市場においては比べる相手がいない毛皮の供給者であった(フォーシス 1998: 56-57)。ピョートル大帝は1697年にクロテンの毛皮を国家が独占する旨を宣言し, クロテンの増産を目指し, 新たな土地の発見を企てた(フォーシス 1998: 151)。これがロシアによる東方進出のきっかけのひとつとなったが, 17世紀末にはヨーロッパ市場ではなく中国において毛皮が高値で交易できることが分かると, ロシアは中国の市場へ北米産の毛皮の販路を求めた(Wolf 1982: 159)。

1625年から1650年にかけて中国との毛皮交易が発展し, 中国はロシアにとって毛皮交易の最大の輸出相手となった。両国の直接取引は1656年に始まり, 1689年にネルチンスク条約が締結されるとキャフタの町が交易地と決められ, 貿易ルートが正式に形成された(和田 1999: 173)。ロシア政府の対中国独占貿易は1762年に終わりを告げたが, シベリアの町とキャフタを結ぶ商品の輸送は私企業によって運営された。「中国人は以前と変わりなく毛皮を求めたので, 1760年代から1820年代までの間, 中国との毛皮交易が栄え, これが原因でロシアの商人は, 遠く離れた新しい毛皮の産地を探し求め, そしてついには, 北アメリカにまでもロシアの植民地を拡大させたのであった」(フォーシス 1998: 133)。1799年にはシトカにロシアの国策会社である露米商会の本拠が置かれ, 1867年にアラスカがアメリカ合衆国に譲渡されるまで, アラスカ地域や北米北西海岸地域において毛皮交易を中心とした活動を行った。

また, 1780年頃から1835年頃までイギリス船やアメリカのボストンを基地とする交易船が北米北西海岸を訪れ, ラッコ皮を入手し, それらを中国の広東へ運び莫大な利益をあげた。このようにロシアとアメリカ, 一時期はイギリスの商人らが, 北米産のラッコ皮を中国市場に出荷していた。

18世紀後半から19世紀前半にかけてすでに大量の人口を抱えていた中国は, シベリア産のクロテン皮やリス皮, カムチャツカ半島, アリューシャン列島, アラスカ, 北

米北西海岸地域で捕獲されるラッコやオットセイの毛皮の一大消費地となった。

北米北方地域の先住民社会における毛皮交易の進展は、主に16世紀以降のヨーロッパと18世紀半ば以降の中国における毛皮需要の拡大と深い関係にあったと言えよう。

3 アラスカ地域における交易

アラスカにおける先住民間交易としては、チュコトカ半島とアラスカ北部にあるベーリング海峡を通しての交易、アラスカ北西沿岸部とカナダ北西部極北地域との交易、アラスカ沿岸部と内陸部との間の交易、アラスカ南西部と北米北西沿岸地域との交易などが存在していた。

アラスカ地域における欧米人と先住民との毛皮交易にはいくつかのルートがあった。ベーリング海峡において先住民を仲介して行われたロシア人やイギリスのハドソン湾会社（Hudson's Bay Company）との東西交易ルート、露米商会によるカムチャツカ半島、アリューシャン列島、アラスカ南西部を結ぶ交易ルート、アメリカ人の捕鯨船や交易船とアラスカ沿岸部に住む先住民との交易ルート、アラスカ内陸部へ進出したハドソン湾会社と沿岸および内陸アラスカ先住民との交易ルートなどがあった。

3.1 毛皮交易期以前

欧米人と接触する以前からアラスカの沿岸部に住む先住民は、交易ネットワークを利用して、旧大陸の先住民、新大陸の内陸部の先住民たちからいろいろな物品を入手していたことが知られている⁴⁾。

アラスカ地域の先住民の間にチュクチ人によって鉄器がもたらされたのは、西暦350年から1000年の間だと言われている（Collins 1937; McCartney 1988: 57; Keddie 1990: 2, 22; 岡田淳子 1999: 81-82）。17世紀の中頃までには、ロシア人はシベリア北東部まで進出し、ヨーロッパ製品がチュクチ人やシベリア側のユピック人の手に渡るようになった。それらの製品はさらにダイオミード島やスワード半島の村々を経てアラスカの先住民社会へ伝わっていった。18世紀の初めにはスレッジ島民、ダイオミード島民、ケープ・プリンス・オブ・ウェールズの先住民が新旧大陸間交易の仲介者として活躍していた。そして現在のコツビュー村の近くにあるホサム・インレット（Hotham Inlet）がアラスカ地域における交易のセンターのひとつになった（Vanstone 1984: 154）（地図2参照）。

ベーリング遠征隊の一員であったステラー（G. W. Steller）は、1742年当時すでに

イヌピアック人の交易者がクスコクイム川あたりまで、鍋、ナイフ、槍先、鉄、タバコを持ち込んできていた (D. Ray 1983: 93)。しかし、シベリア側のチュクチ人とアラスカ側のイヌピアック人やユッピック人との間のベーリング海峡交易ネットワークは、1820年代にヨーロッパから来た探検家たちによって妨害されることになる (Burch 1988: 238)。

アラスカ北部および北西部地域においては、19世紀前半以前から沿岸に住む捕鯨民と内陸のカリブー狩猟民の間で生活必需品が交易されていた。前者は後者に、光熱用燃料、調味料や食物となり、かつ食料の保存に利用される海獣 (アザランやセイウチ、シロイルカ、ホッキョククジラ) の脂肪や油を提供した。後者は前者に衣類、寝具、テントの素材となるカリブー皮を提供した (Sheehan 1995)。毎年、夏には内陸民の80%が交易のために沿岸に来ていた (Sheehan 1995: 190)。また、沿岸部住民は、交易を目的として、沿岸にある他の村々をウミアク (皮製大型ボート) を利用して訪問しあっていた。これらの先住民間交易では捕鯨キャプテン (*umialik*) が中心的な役割を果たし、潜在的に交易の仲介者の機能を有していた (Sheehan 1995: 191)。

アラスカの極北地域とカナダの極北地域の間にも先住民間交易のネットワークが存在していた。ステファンソンは、ベーリング海峡からカナダ極北北西部に住むコパー・イヌイト人へ、そしてそこからさらにハドソン湾へ、バフィン島を越えてグリーンランド北西部へ至る広大な先住民の交易ネットワークが存在しており、そのネットワークの上をシベリア産の鉄という希少資源が交易品として運ばれていたと考えた (Stefansson 1914)。このネットワークの存在は実証されていないが、少なくともカナダ極北北西部のコロネーション湾周辺で産出されるソープ・ストーンで作られた石ランプや石鍋がアラスカの先住民へと交易され、さらにアラスカの沿岸部やシベリアへと流通していたことが考古学的に証明されている (Morrison 1991: 239-240)⁵⁾。

カナダ中央部マニトバ州のウイニペグ湖あたりに住んでいたオジブワ人 (の祖先) が作ったと考えられる装飾ポーチや遺物が、チュコトカ半島や、アラスカ、現在のブリティッシュ・コロンビア州で発見されている。これらの品物は先住民の交易ネットワークを介して運ばれたと考えられている (Burch 1988: 240)。

アラスカ南部沿岸地域とブリティッシュ・コロンビア州地域との間では、海獣の油、セイウチの牙、ツノメドリのくちばし、カリブーやラッコなどの毛皮、こはく、銅、ツノガイ、アワビの貝殻、木製カヌー、山羊角製スプーン、衣類が交易されていた (Burch 1988: 237)。欧米社会との接触の後には、ロシア、イギリス (ハドソン湾会社)、アメリカの製品や物資がこのネットワークを通して先住民社会の隅々まで浸透

した。

このようにアラスカ先住民は欧米人と接触する以前から近隣地域の他の先住民集団と交易を行い、生活に必要な資源や希少価値を持つ資源をお互いに交換していたのであった。

3.2 毛皮交易期

アラスカ地域の毛皮交易については、露米商会などロシア人による交易、ベーリング海峡交易、捕鯨船との交易の3つに分けて整理したい。

3.2.1 ロシア人による毛皮交易

ロシア人は15世紀から18世紀にかけてシベリアを制圧し、さらに18世紀からラッコやオットセイの毛皮を求めてアラスカ方面へ進出した。アラスカ進出のきっかけは、ベーリング (Vitus Bering) による北太平洋探検であった。彼は、第一次探検において1728年に「ベーリング海峡」に到達し、さらに第二次探検において1741年に北米大陸のアラスカおよび北西海岸に到達した。ベーリングの部下はカムチャツカ半島へ帰る1742年までに数百枚ものラッコの毛皮を入手した。それらは中国の北部で高値で売買されたため、その後1700年代の終わりまでに、このことを聞き知ったコサック兵やプロムィシレンニキ (Promyshlenniki) と呼ばれるロシア人の小規模個人経営の商人数百人が、毛皮を求めてカムチャツカ半島のニジネカムチャツカ (Nizhnekamchatsk) やボルシェレツク (Bolsheretsk) の港からアリューシャン列島のコマンドル諸島やニア諸島へと交易遠征を行った (Veltre 1990: 176; Fisher 1996: 123) (地図1参照)。さらに18世紀の後半にはアラスカ南部に進出した。初期のプロムィシレンニキは、商人、農民、下級軍人、船乗りらで、無統制で略奪的な交易活動を行っていた (郡山 1980: 259; フォーシス 1998: 170-171)。

ロシア人は1763年にはコディアク島まで進出し、1787年にはスリー・セインツ・ベイに居住地を創り出した。1790年にはビリングス隊がアリューシャン列島を調査し、1791年にはマラスピナ隊が北米北西海岸北部のチュガシュ地域を調査した (ラフリン 1986: 209-232; Burch 1988; Fisher 1996; Crowell 1997)。

海や沿岸部に生息するラッコやアザランを捕獲するためには高度な狩猟および航海技術を必要としたため、アリューシャン列島やアラスカ地域におけるロシア人による毛皮の獲得は、主にアリューート人や太平洋エスキモー人のハンターからの供給に依存していた (Townsend 1975: 563; Crowell 1997: 13)。

アリューシャン列島やアラスカ地域において先住民から毛皮を入手する方法には、武力で先住民に労働や毛皮の供出を強制する、人質を取る、先住民の首長に報酬を与え平民や奴隷を強制労働に使用する、毛皮を毛皮税（ヤサク）として徴税する、ビーズ、タバコ、衣類、銅製ヤカンなどロシア人から見ると安価な交易品と交換する、などが初期には見られた（Crowell 1997: 13-14）。この地域におけるロシア交易の特徴のひとつは、ロシア正教の宣教師とともに同地域に到来し、多数のアリュート人を改宗させたことであった（Fisher 1996: 141）。

アリューシャン列島やアラスカ地域におけるロシア人による毛皮交易には、大別すると2つのタイプの交易が存在していた。強制狩猟や徴税による毛皮の収奪および交易品との交換による毛皮の獲得である。前者の方法は、アリュート人やコディアク人、太平洋エスキモー人らとの毛皮交易に利用された。トリンギット人⁶⁾のようにロシア人が軍事的に制圧できなかった集団や、アラスカのユピック人、チュガシュ人（ユピック人の一グループ）、エyak人（南西アラスカに住むアサバスカン語族系先住民）のように部分的にしか支配できなかった集団には後者の方法がとられていた（Townsend 1975: 559; Crowell 1997: 15）。このように、露米商会とアラスカ地域の先住民との関係には多様性が見られ、アラスカにおけるロシア人による毛皮交易は決して一元的なシステムではなかったと言える（Townsend 1975）。

1766年にロシア政府は、アリューシャン列島に住む先住民はロシア臣民であると宣言し、コサック兵やロシア人による虐待から彼らを保護するように努めた。さらに1788年には、アリューシャン列島とアラスカの先住民に対し、毛皮税の支払いを免除した（Pierce 1988: 121）。しかし現実には、1786年にオットセイの繁殖地であるプリビロフ諸島が発見されると、一部のアリュート人を移住させ、プリビロフ島のセント・ジョージやセント・ポールに住まわせ、彼らに狩猟を強制した（ラフリン 1986; Veltre 1990: 177; 岡田宏明 1997: 3）。このような強制移住と強制労働は千島列島においても認められた。当時のアリュート人の平民層のハンターは、オットセイやその他の毛皮獣を捕獲する以外に、冬用毛皮服や食料をロシア人に供給することを要求されていたが、ロシア人たちは彼らにビーズ、指輪、タバコ、衣類など交易品の形で最低限の報酬を支払うにすぎなかった（Townsend 1975: 563; 郡山 1980: 281; Crowell 1997: 233）。

1799年には、ロシアの国策会社である「露米商会」が設立され、千島列島から北米北西海岸にかけての広大な新植民地はその私領となり、それは国家権力に代わる統治機関となった（郡山 1980: 266-267）。露米商会の業務は、（1）植民地におけるすべ

ての産業の経営，(2) 会社の経費による植民地との通航，(3) 太平洋諸地域の発見と占領，布教，(4) 各地域における毛皮交易の経営，(5) 先住民との友好関係の保持と交易の促進，(6) 広東，日本との通商条約の締結を求めることであった(郡山 1980: 267)。この中で，露米商会にとっては，ラッコ皮とオットセイ皮の獲得が最も重要な活動であった。それらの毛皮は毎夏シトカから船でオホーツクへ搬送された後，イルクーツクまで陸送された。それから毛皮はモスクワかキャフタのいずれかへと陸送された(Pierce 1988: 122)。

1808年には，露米商会はシトカに総督府を置き，アラスカ植民地の中心とした。1821年に新たな憲章が露米商会に付与され，新しい体制が敷かれた。これによって同商会は事業の焦点を新大陸における毛皮交易とした。トリンギット人との衝突，アメリカ人商人やハドソン湾会社との競合をさげ，南下を中止し(Fisher 1996: 127)，アラスカの内陸部へ毛皮資源を求めて進出するようになる。先住民のハンターには労働の報酬として，食料，衣類，ブーツ，ビーズ，タバコなどが支払われた。また，狩猟隊の編成や露米商会の規則の施行に協力したアリュート人や太平洋エスキモー人のリーダーには，衣類，現金，地位を象徴するメダルなどが与えられた(Crowell 1997: 14)。

露米商会は1833年にアラスカ中西部のユーコン河の河口近くにセント・マイケル交易所(St. Michael)を開設し，1841年にはアラスカのクスコクイム河中流にコルマコフ交易所(Kolmakovski Redoubt)を開設した(Oswalt 1980; D. Ray 1983)。これらの交易所は，アラスカの内陸部に住むアサバスカン語族系の先住民や，北方に住むユピック人やイヌピアック人と毛皮を交易するために創られた(地図2参照)。

1860年代にセント・マイケル交易所に来ていた先住民は，ユーコン河の川沿いの内陸地域に住むアサバスカン語族系の先住民，コツビュー湾やコブク川，ベーリング海峡地域，ロマンゾフ岬周辺に住むユピック人やイヌピアック人であった(D. Ray 1983: 87)。1830年代にはユーコン河を下って大量の毛皮がアラスカ内陸部からセント・マイケルに持ち込まれていた(D. Ray 1983: 81)。1842年頃にはマレミウト(Malemiut)と呼ばれるグループ(Ganley 1995)が先住民の交易者としてセント・マイケルとその北方にあるコツビュー湾やベーリング海峡との間を往来していた(D. Ray 1983: 83)。

1843年にコルマコフ交易所からクスコクイム河に沿って交易の旅に出たザゴスキン(Zagoskin)は，次のような交易品を用意していた。それらはタバコ(約8キログラム)，白色，黒色，赤色のビーズ(約4キログラム)，暗青灰色のビーズ(80さし)，

ツノガイの貝殻 (517個), 針 (400本), 銅製の鈴 (75個), 耳飾り (24組), 小さなベル (40個), 銅製の指輪 (22個), 海軍の制服用のボタン (20個), ボタン (10個), 削り道具 (9本), 銅製の耳飾り (6組), アリュート式斧 (8本), 真鍮製パイプ (6本), 角製くし (6本), 発火用フリント (4個), ヤクート式パイプ (4本), ヤクート式ナイフ (4本), 銅製腕輪 (3組), 小型の鏡 (3枚), 鉄製腕輪 (2組)であった (Oswalt 1980: 96-97)⁷⁾。針を例外とすれば, 交易品の大半は装飾品や嗜好品, 社会的威信を示す品であり, 実用的な用途があるものではなかった。この中で先住民が最も好む主要な交易品はタバコで, 次はビーズであった。このほかにツノガイの貝殻やトリングット人が好む衣類用布地なども人気の高い交易品であった (Oswalt 1980: 97)。

1861年にコルマコフ交易所にやってきたユーコン河下流に住むユピック人は, アザラシの脂肪, アザラシやビーバー, キツネなどの毛皮, ビーバー香 (castoreum) を持参し, トナカイの毛皮, タバコ, キャラコ布地, ツノガイの貝殻, ビーズ, 腕輪, ヤクート式ナイフ, 針などと交換していた (Oswalt 1980: 98)。

露米商会がアラスカ植民地を営するうえでの大問題は, 地理的な周辺性のために食料や日用品, 交易品, 弾薬など十分な量をロシア本国から恒常的に入手できないことであった。このため18世紀末にイルクーツクの商人団は, 東方植民地の経営を行うために, キャプタでの中国との交易 (1785年に中止され, 1793年に再開された), 海路による中国市場への進出, 日本との通商を強く望んでいた (木崎 1991: 67)。アラスカの遺跡から出土するビーズや陶器の大半は, 18世紀後半から19世紀初めにイルクーツクに本拠を置く商人が中国やロシアから入手した品物をカムチャツカ半島へ送り, さらにそれらがシトカに運ばれた後に, アラスカ先住民の間に広がったものである (Crowell 1997: 232)。流通した交易品にはイルクーツクで製作されたものもあった。クローウェルは, イルクーツクでアラスカ交易用や中国交易用のビーズなど交易品が生産されていることを指摘し, ロシアのアラスカ植民地経営におけるイルクーツクの重要性を強調している (Crowell 1997: 232)⁸⁾。

露米商会は, 1801年から1841年まではアメリカの交易船から食料や物品を, 1840年から1849年頃まではハドソン湾会社から食料やイギリス製品を購入していた (Crowell 1997: 15)⁹⁾。このため, 1840年以降アラスカにはかなりの数のイギリス製品が入ってきている (Crowell 1997: 21-22)。ハドソン湾会社は露米商会の交易者と競争するために, カナダ側からアラスカ内陸部に進出し, 1847年にフォート・ユーコン (Fort Yukon) に交易所を開設し, アサバスカン語族系の先住民と毛皮を取引するよ

うになった。

露米商会の交易所は、1869年にアラスカがアメリカ領化されたことに伴い、アラスカ商会（The Alaska Commercial Company）によって買収された（Lee 1996）。その後は1917年頃までアメリカの交易者が交易所を使用し続けた。

3.2.2 ベーリング海峡交易

チュコトカ半島側とアラスカの北西部地域に住む先住民の間でベーリング海峡を挟んで交易が行われていたことが知られている（Bogoras 1904-1909: 53-58; D. Ray 1975: 97-98; Michael 1976: 100-101; Hickey 1979: 420-421; Vanstone 1979: 63-64; Pierce 1980: 30-31）。このベーリング海峡交易は15世紀頃までには形成されていたと考えられている（Hickey 1979: 411, 430）。この交易ではシベリア側からトナカイの毛皮、アメリカ側からアナグマの毛皮や木製容器、木材が交換されていた（D. Ray 1983: 83）。

この交易で重要な役割を果たしたのは、シベリア側ではチュクチ人であった。彼らはほかの東北アジアのグループとは異なり、1700年代からロシア帝国（コサック兵）の侵略に抵抗し続けてきた（黒田 1992; フォーシス 1998: 163-168）。しかし、チュクチ人は鉄製品と火器の入手などロシア人との交易で得られる物質的利益に気づき、1764年以降ロシア人と接触を始め、人質をとらない条件でいくつかのグループは進んで毛皮税を支払った（フォーシス 1998: 169）。そして1788年にロシアとチュクチ人は和平条約を締結し、1789年にコリマ河沿いに交易のためのアヌイ交易所がロシアのヤクーツク当局によって築かれた。このことが大きな刺激となり、ベーリング海峡交易はさらに活発になり、コツビュー湾から北はポイント・バローにまで及ぶ沿岸部の既存の交易関係を強化し、促進させたと考えられている（D. Ray 1983: 83）。

1789年よりアヌイ交易所で年に一度交易市場が開設されるようになったが、そこでは儀礼的な交易の後、実質的な交易が執り行われた。まず、交易が開始されるのに先立ち、ロシアの役人とチュクチ人のリーダーとの間で贈り物の交換がなされた。役人はロシア皇帝の代理としてチュクチ人のリーダーに茶、タバコ、斧、ナイフ、やかん、そして時には地位を象徴するメダルを与えた。一方、チュクチ人のリーダーは役人にアカキツネの毛皮を贈った。役人はその贈り物を貢税と見なし、この儀礼的な贈与交換の後に交易が開始された（Znamenski 1999: 26）。

このアヌイでの交易はチュクチ人に対してヨーロッパからの物品の供給を大きく増大させた一方で、チュクチ人だけで供給しきれない毛皮の巨大な需要を生み出した。

チュクチ人はこの需要に対処するべく、アラスカの先住民との接触を拡大させ、その結果として大陸間の交易ネットワークが急速に展開したのであった (Burch 1988: 234)。このために、この交易によってチュクチ人やイヌピアック人の仲介者を経て新大陸に入っていくロシア製品の量がおおはばに増加した。19世紀の前半にベーリング海峡交易はピークに達し、ロシア人、仲介者としてのチュクチ人、アラスカ先住民という交易のネットワークが作動していた (Burch 1988: 234-235)。

ロシア側からアラスカ側へと入ってくる主な交易品はタバコ、ビーズ、金属製ボタン、磚茶、装飾品、ナイフ、鋳頭、針、鍋、やかん、はさみなどの金属製品であった (Burch 1988: 235-236; Morrison 1991: 242)。タバコは初期にはとるにたらない交易品であったが、1810年頃までには最も重要なものとなっていた (D. Ray 1975; Burch 1988: 235)。一方、アラスカからチュコトカ半島の方へ流れていった交易品は、テン、ビーバー、ホッキョクキツネ、ジャコウネズミ、カワウソ、ヤマネコ、アナグマ、アザラシの毛皮、海獣の油、セイウチの牙、木彫品、クジラのヒゲなどであった (Burch 1988: 235; Morrison 1991: 242)。この交易のネットワークを通して、新旧両大陸の先住民の間で資源や物品も交換された。アラスカへはチュクチ人のトナカイの毛皮が、チュコトカ半島へは弓矢などを作るもとなる木材料、仮面、パイプ、腕、人形、衣類が交易された (Burch 1988: 235)。

1867年にアラスカがアメリカ領になってからもイヌピアック人とチュクチ人との交易は続いたが、それは彼らにとって生活必需品の交換と言うよりも贅沢品の交換、そして実質をとまわらない形式的な交易へと変貌した。衣類の素材となるシベリア産のまだら模様の柔らかいトナカイの毛皮 (spotted tame reindeer skin) は、鉄製やかん、ナイフ、キャラコ布地、タバコ、マッチ、乾パンと交換された (D. Ray 1983: 89)。

1900年から1950年頃までの時期のベーリング海峡交流を研究しているシュワイツァーらは、交易品を次のように報告している (Schweitzer and Golovko 1995)。チュコトカ側からリトル・ダイオミード島やウェールズへ持ち込まれた品物は、ホッキョクキツネ、トナカイ、アライグマ、クマ、アザラシなどの毛皮、セイウチの牙、皮革製ベルト、先住民の靴や手袋、タバコであった (Schweitzer and Golovko 1995: 113)。一方、アメリカ側からナウカンや他のチュクチ人の村へもたらされた品物は、アメリカ製のライフル、銃弾、小口径ライフル、セイウチの牙を細工するためのドリルなど道具類、食料 (ビスケット、茶、缶詰、菓子、果物、蜂蜜)、タバコ、酒類、アライグマの毛皮、ビーバーの毛皮、既製服などであった (Schweitzer and Golovko 1995: 112-113)。

チュコトカ半島の先住民は、ベーリング海峡交易に長い期間にわたり深く関わってきたために、1920年代にシベリアがソ連領になり、ソ連政府によってベーリング海峡交易が禁止された時でも、アラスカ側からの交易品に対する需要は消えなかった (Schweitzer and Golovko 1995: 114)。1900年頃以降におけるこの交易の特徴は、チュコトカ半島の方からは原材料や先住民が作った品物がアラスカの方へ入り、アラスカ側からは欧米製の品物がチュコトカ側へ入っていったことである (Schweitzer and Golovko 1995: 114)。特に1930年代や1940年代にはこの傾向が強く見られた (Schweitzer and Golovko 1995: 117)。この数世紀にわたって行われたベーリング海峡交易は、米ソの冷戦の開始をもって幕を閉じた。

3.2.3 捕鯨船との交易

ベーリング海峡北域に多数のクジラが生息していることが分かると、1850年頃からアメリカの捕鯨船が進出してきた (Bockstoce 1995)。アメリカ人は捕鯨に従事するかたわら、チュコトカ半島やアラスカ北西部の沿岸で越冬し、チュクチ人やイヌピアック人と交易を行った。ラム酒、火器、弾薬、鉄製ナイフ、斧、磁器、針、タバコ、衣類、小麦を、クジラのヒゲやセイウチの牙と交換していた。アメリカ人がもたらした交易品は、先住民の仲介者によってさらに他地域へと運ばれていった (Burch 1988: 236)。1880年頃からベーリング海峡におけるクジラやセイウチが減少し始めたために、捕鯨者は先住民との毛皮交易に力を入れるようになった。この捕鯨者による交易は、鯨類がこの海域から姿を消した1900年代の初めまで続いた。

捕鯨者がこの地域に出現した直後、ハワイ諸島に基地を持つ小型交易船がアラスカに到来し、先住民と交易を行った。1851年の夏までに6隻の小型交易船がオーストラリアやハワイ、ホンコンからベーリング海域に到来し、先住民と交易を行ったことが知られている (Bockstoce 1995: 182)。彼らは主に火器とラム酒、ウィスキーを、先住民がもたらすクジラのヒゲやセイウチの牙、各種毛皮と交易した (Burch 1988: 236)。例えば、1854年にホノルルから同地域へやってきたあるスクナー船は、重量にしてセイウチの牙1.8トンあまり、クジラのヒゲ1.4トンあまり、そしてテンやイタチの皮200枚ないし300枚を母港へ持ち帰った (Bockstoce 1995: 184)。捕鯨者や交易者がもたらしたラム酒は、新旧両大陸のベーリング海域の先住民社会における紛争の原因となった (Bockstoce 1995: 188-191)。

3.3 アラスカ地域における毛皮交易の諸影響

アリューシャン列島やアラスカ地域の先住民に及ぼした毛皮交易の諸影響を整理しておきたい。

第一に、アリューシャン列島に住むアリュート人の人口減少である。1741年から1800年頃までの間にアリュート人の人口は1万5千人あまりから2千人あまりへと減少したと言う (Veltre 1990: 178)。この人口減少にはいくつかの原因が考えられる。ひとつには、強制狩猟や強制移住などロシア人の交易方法があまりにも過酷であったため、多くのハンターが命を落とした。ラッコ猟期にあたる夏中(4年間に及ぶ事例もあった)ロシア人によってハンターが村から狩猟地へと強制的に連れ出されたために、食料を獲得するための狩猟・漁労活動は村に残った女性、老人、子供が行わざるを得なくなり、冬期に食料が欠乏し、アリュート人の栄養状態に問題が起きることがあった (Townsend 1975: 563)。また、男性の不在は女性の出産サイクルにも影響を及ぼした (Veltre 1990: 179)。さらに、ロシア人らとの接触によってもたらされた結核、インフルエンザ、はしか、天然痘、梅毒などの伝染病も人口減少の原因であったと考えられる (Veltre 1990: 179; Fisher 1996: 144; 岡田淳子 1999: 20-21)。伝染病の波及による人口減少は1860年代から1880年代にかけてベーリング海域の先住民社会にも見られた (Bockstoce 1995: 195)。中部および西部アリューシャン列島では、村人口が極端に減少した場合には東部アリューシャン列島にある他の村へ移住したため、多くの村が廃村になった (Veltre 1990: 178)。

第二は、交易の仲介者の出現によって、先住民社会の階層差が顕在化したことである。アリュート社会における首長や貴族は、ロシア人とアリュート人との仲介者となり、彼らの地位や富がかつてよりも強化された (Townsend 1975: 564; Veltre 1990: 180; 岡田宏明 1997: 4)。ベーリング海域のチュクチ人やイヌピアック人、ユッピーク人の中には、ヨーロッパ人や他の先住民との毛皮交易を通して莫大な富を築く者が出現した (Bockstoce 1995: 195)。例えば、交易の仲介者としてシベリア側のインディアン・ポイントに住むある先住民は全長約18メートルのスクーター船を購入したほどであった (Bockstoce 1995: 197-198)。アラスカ側のポント・ホープにも交易の仲介者によって富豪となったイヌピアック人がいた (Bockstoce 1995: 199)。

第三に、直接的なロシアの植民地支配を免れる一方、露米商会との毛皮交易やベーリング海峡交易から恩恵を被ったイヌピアック人やユッピーク人は富を蓄積し、独自の民族文化を開花させた。例えば、ユッピーク人の仮面制作は18世紀の末から20世紀

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

の初頭にかけて絶頂期を迎えている（岡田淳子 1999: 95）。

1790年代の後半にはロシア正教の宣教師がアラスカ南西地域へ到来し、アリュート人やユッピック人に改宗を進めていった（Veltre 1990: 180）。このほか、1860年頃に見られたユッピック人の季節移動における変化（岡田淳子 1999: 158）や、1820年代頃に見られたアリュート人の半地下式家屋バラバラの大型化、近代的設備を持つ家屋の出現（Veltre 1990: 178; 岡田宏明 1997: 4）などの変化が毛皮交易との関係で起こった。

4 北米の北西海岸地域における交易

北米大陸の北西海岸とは、北はアラスカ半島の南部から南は現在のオレゴン州あたりにかけての海岸地域を指す。その地域に住む先住民はこれまで一括して北西海岸インディアンと呼ばれてきたが、その実態は複数の異なる地縁集団の集合であった。彼らはポトラッチやトーテム・ポールを持つ人々として有名である¹⁰⁾。

この地域の先住民の交易活動を歴史的に見ると、欧米社会と接触する以前の先住民間交易と、毛皮交易期以降の欧米人と先住民との交易に大別できる。さらに毛皮交易期は、海洋毛皮交易期と内陸毛皮交易期に分けることができる（Fisher 1977, Gibson 1988）。海洋交易期は1780年代に始まり、1840年代まで続き、内陸交易期は1840年代から始まる（Gibson 1992）。

4.1 毛皮交易期以前

1780年代に北西海岸先住民と欧米人との間で毛皮交易が開始されたが、それ以前には先住民間で交易が広範囲に行われていた。時間的な深さは確定できないが、接触期直前については次のように推定できる。

北西海岸先住民は、近隣集団同士や、内陸に住む諸集団と物々交易を行っていた。海岸部の南北、海岸部と内陸部では環境に差異が見られ、北の物と南の物、海岸の物と内陸の物とが交易されていた。北西海岸地域の諸集団が提供した交易品は次の表1に示す通りである（Gibson 1988: 375-376）。

沿岸部ではカヌーを使った往来があり、交易が行われていた。例えば、北西海岸の北部地方でとれるツノガイはヌートカ人によって採集され、ユーロク人の居住地域まで交易によって運ばれていた。大きく色彩の豊かなカリフォルニア産のアワビの殻（装身用）やオレゴン州の西部でとれる黒曜石は、ブリティッシュ・コロンビア州中部の

表1 沿岸地域の先住民間の交易

グループ名	主な輸出交易品
トリンギット人	山羊毛製ブランケット, テンの毛皮, 自然銅の板, 木製バスケット
ハイダ人	杉製のダグアウト・カヌー
チムシアン人	山羊の角製スプーン, ワタリガラスの鳴り物, ダンス用帽子, キュウリウオの油
ベラ・クーラ人	山羊の毛と角
クワクワカワク (クワキウトル) 人	イエロー・シダー製の上着, 木製品
ヌートカ人	杉製のダグアウト・カヌー, サメの歯, ツノガイの貝殻
海岸セーリッシュ	犬毛製のブランケット
チヌーク人	シカの毛皮, 奴隸
ユーロク人	タバコ, アワビの貝殻
カリフォルニア州および オレゴン州の西部 (地域名)	アワビの大きく色彩の豊かな貝殻 (Heizer 1940), 黒曜石

沿岸まで交易によって広まっていた (Fisher 1996: 123-123)。これらの交易活動を通して、財物だけでなく様々な文化要素が地域を越えて広がっていった。

また、内陸部と沿岸部では、河川を利用して、交易が行われていた。例えば、チヌーク人はダレス人 (Dalles) と、海岸セーリッシュ人はチルコチン人 (Chilcotin) や下流キャリア人 (Lower Carrier) と、チムシアン人は上流キャリア人 (Upper Carrier) やセカニ人 (Sekani) と、トリンギット人はタールタン人 (Tahltan) や他のアサバスカン語族系の先住民と交易関係を持っていた (Gibson 1988: 376)。このネットワークを通して内陸部から沿岸部へとヘラジカや森林トナカイ、シロテンの毛皮、ヤマアラシの棘で作った刺繍、モカシン、砂銅などが運ばれた (Gibson 1988: 376)。一方、北西海岸先住民から内陸部の先住民には杉樹皮製バスケット、魚油、貝殻製飾りが交易された。

特に、太平洋に流れ込む河川の河口に住む先住民は交易者や交易仲介者として活躍した (Fisher 1996: 122-123)。スティキネ川流域とチルカット川流域を支配していたトリンギット人は、銅板やシロテンの毛皮、バスケット、杉樹皮製上着、アジア産の鉄などを独占的に交易していた (Gibson 1988: 376)。また、内陸に住み、良いサケの漁場を持っていないグループは、サケを入手するために下流へとやってきた。コロンビア川流域に住むダレス人やチヌーク人は仲介者的な交易者として活躍していた (Fisher 1996: 120, 134)。

このように北米の北西海岸地域では、欧米社会との毛皮交易が始まる以前から先住民間での交易が広く行われていた (Wike 1951: 92-107)。

4.2 毛皮交易期

北米の北西海岸先住民は、欧米からの探検家との接触を契機に、毛皮交易に巻き込まれることになる。この北西海岸地域における毛皮交易は、船で海からやってきた欧米人との海洋毛皮交易 (Howay 1973) と、内陸からやってきた交易者との内陸毛皮交易の2つに分けられる。海洋毛皮交易では、ロシア人やスペイン人、イギリス人、アメリカ人が活躍した (Gibson 1988)。

4.2.1 海洋毛皮交易期

ロシア人の交易活動

1741年の第二次ベーリング探検の後、ロシア人はラッコを求めてアリューシャン列島へと進出し、乱獲した。その後、ラッコ皮を求めて1787年には北米の北西海岸地域北部へと進出し、コディアック島のスリー・セイント・ベイに植民地の本拠を置いた。彼らはコニアグ・エスキモー人やアリュート人を使ってラッコを捕らせるとともに、トリングット人と陸獣の毛皮を交易した。1800年頃には、露米商會が獲得したラッコ皮の75パーセントがシトカ湾で捕獲されたものであった (Gibson 1988: 377)。ラッコの毛皮はシトカから船で北太平洋を横断してカムチャツカ半島へ、さらにオホーツク湾を横断してオホーツクの町へ運搬された。オホーツクからは馬車やソリを使って中国北部の町キャフタへ運ばれ、中国へ輸出された (Gibson 1988: 378; 1992: 15-16; Pierce 1990) (地図1参照)。

中国 (清朝) とロシアの交易は17世紀に始まり、1689年のネルチンスク条約で承認された。当初はロシアの商隊が北京まで出向いていたが、1727年のキャフタ条約によってロシアと中国との国境に位置するキャフタに交易所を設置し、毎年12月から翌年の2月にかけて取引が行われることになった (Pierce 1990: 73-74)。1768年から1785年にかけてのロシアによる対中国輸出品の85%は毛皮であった。毛皮の大半はシベリア産のリスであったが、1740年代より北米産のラッコ皮が加わった。残りの15%は皮革製品、ヨーロッパの布地、ガラス製品、金属器具、牛、馬、駱駝、狩猟犬であった。一方、中国がロシアに輸出した物品は絹製品、綿布、茶、タバコ、砂糖、大黃根、薬用人参、手工芸品であった (Pierce 1990: 73; 山中 1995: 102-104)。

1820年頃にキャフタの地を訪れたイギリス人コチレン (Cochrane) は、中国からロシアに輸出された主な商品は茶、木綿、南京木綿ズボン、絹、絹じゅす (サテン)、珍品、小型の飾り物であり、ロシアから中国へ輸出される主な商品はホッキョクキツネの毛皮、テン皮、カワウソ皮、ラッコ皮、ヤマネコの皮、ビーバー皮、リス皮であった、と報告している。特に、リス皮は数百万枚にも及んだと言う。中国商人に人気のあったのは高級毛皮ではなく、軽く、暖かく、長持ちし、安価なリス皮であった。なお、高級毛皮は、ロシア人、トルコ人、ペルシア人用にモスクワやニジニ・ノブゴルドへ運ばれていた (Cochrane 1824: 372)。アラスカ植民地経営の困難さに直面していたロシア側は1800年から1825年にかけてキャフタ交易に関心を失う一方、アムール川地域への関心を復活させた (Pierce 1990: 76-77)。

1840年頃には、ハドソン湾会社の交易者やアメリカ人の船長たちが露米商会の3、4倍の値段相当でラッコの毛皮を交易したために、トリングット人は主にアメリカ人やイギリス人と取引をした。さらに、アメリカ人の交易者はトリングット人にマスケット銃や弾薬を提供し、その使い方を教え、ロシア人と敵対するように働きかけた (Gibson 1988: 377)。トリングット人は1802年、1809年、1813年、そして1855年にシトカの交易所を攻撃した。露米商会はトリングット人を相手とする交易をうまく統制することができなかったうえに、トリングット人からはアリュート人の3倍から5倍の価格で毛皮を購入せざるを得なかった (Fisher 1996: 141)。このため、露米商会はアレクサンダー半島以南への進出はせず、アラスカの内陸部へと進出するように方針を変更した (Arndt 1990)。

スペイン人の交易活動

メキシコに新大陸の植民地の拠点を置いていたスペインは、イギリスやロシアの動きを警戒しながら、領土の拡大と防衛を目的として海上からの遠征隊を派遣した。1774年には J. ペレス・ヘルナンデス (Juan Perez Hernandez) が「サンディエゴ号」で北米北西海岸地域のアレクサンダー半島まで北上し、衣服、ビーズ、ナイフと交換にハイダ人からラッコの毛皮、樹皮製儀礼用ブランケット、木製箱を入手したことが知られている。さらに、スペインは1775年から1800年にかけてメキシコのサン・ブラスから遠征隊を何度か派遣しているが (Gibson 1988: 379)、先住民との交易にはほとんど関心を払わなかった。

イギリス人の交易活動

キャプテン・クック (Captain James Cook) は、第3回目の航海を行った1778年にヌートカ湾に停泊した。その時に船員たちがくず鉄をラッコの毛皮と交換した。さらにクック・インレットでは、ラッコの毛皮をビーズと交換した。1779年に船が中国の広東に立ち寄った際、ラッコの毛皮が高値で売れ (1 シリングの投資が90ポンド=1800シリングになったため)、船員が北西海岸へ戻ることを熱望した。

このことが契機となり、1785年にはジェームズ・ハンナ (James Hanna) が30人の乗組員とともに「ラッコ号」で交易を目的として北西海岸へ行き、ヌートカ湾に停泊した5週間のうちに560枚ものラッコの毛皮を獲得し、大きな利益をあげた。以降、多数のイギリス船が交易を目的として当地域を訪れたが、1803年までにイギリス船はこの地域に姿を見せなくなった。これは、北西海岸へ交易にいったイギリスの海洋商人たちが中国製品をイギリス本国に持ち帰り、販売することをイギリス東インド会社が禁止したからであった (Gibson 1988: 377)。

アメリカ人の交易活動

1788年にはグレイ船長 (Captain Robert Gray) がボストンから北米北西海岸へ交易にやってきた。これがアメリカ人によるボストンやセーラム=北西海岸=中国南部を巡る三角貿易の始まりであった。1793年以降はアメリカ船の数がイギリス船を上回っていた。

秋にボストンを船で出発し、南半球の夏に南米のホーン岬を通過して、春に北米北西海岸に到着した。春から夏にかけて同海岸にとどまり、ラッコの毛皮を集め、約3週間かけてハワイ諸島、ポルトガル領マカオを経由して広東へ運んでいった。冬に換金し、茶、絹、南京綿製のズボン、磁器、薬、香辛料、中国製の骨董品を購入し、インド洋、喜望峰を経由して交易品をヨーロッパ市場やアメリカ市場へ運んだ (地図1参照)。

アメリカのニュー・イングランド地域から来た交易者は、1788年から1826年までに北米北西海岸経由でアメリカと中国との間を127回以上航海したことが知られている (Latourette 1927: 255-261)。また、フィッシャーによると、1785年から1825年の間にアメリカ船を中心にのべ330隻あまりの交易船が北西海岸を訪れたと言う (Fisher 1977: 13)。広東でのラッコの毛皮交易はアメリカ人が独占するようになり、この独占は北米の北西海岸地域でハドソン湾会社や露米商會が交易を開始する1835年頃まで続いた (Gibson 1988: 380)。

交易のやり方は、交易船が特定の場所に停泊し、そこに先住民が集まってくるのを待つというものであった。1786年にはヌートカ湾に2000人あまりのヌートカ人が、1791年にはクラヨクオト湾に3000人以上のヌートカ人が、1799年にはカイガニに2000人弱のハイダ人が、1805年にはシトカ湾に2000人のトリンギット人が集まったと言う (Gibson 1988: 382) (地図2参照)。ハイダ人は特に交易に熱心で、商売にたけていた。

この交易の主要な対象であったラッコは北西海岸地域においても乱獲されたため、1790年代には多数いたラッコが1830年代には激減し、1840年代にはほとんどいなくなってしまう (Gibson 1988: 385)。また、1825年頃には北西海岸においてハドソン湾会社の交易活動が活発になり、1842年までにはアメリカ人の交易者は海洋毛皮交易から手を引いた (Fisher 1977: 3; Gibson 1988: 375)。

交易品

1793年から1801年にかけて、海洋船による毛皮交易は最盛期を迎えた (Fisher 1977: 3)。コロンビア川からクイーン・シャーロット諸島にかけての地域において、毛皮交易が最も盛んに行われていた (Fisher 1996: 124)。1791年から1802年までは交易競争が激しくなり、先住民から買い取る毛皮の価格が高騰するとともに、ラッコの乱獲が進んだ。北西海岸先住民が入手することを欲した交易品はポトラッチ儀礼に係わる物品であった (Gibson 1988: 385-386)。

1780年代後半には、鉄や銅、色つきビーズが交易品として北西海岸先住民の間で人気が高かった (Gibson 1988: 386)。鉄は、釣り針、鏃、槍先、のみ、ちょうな、短剣の刃部など道具や武器を作るのに利用された。銅は、腕輪、耳飾りなど装身具を作るのに利用された。銅板からは19世紀に肥大化した銅板紋章が作られた (Scott 1966; Jopling 1989)。また、紺色の綿布、既成服、毛布、粗ラジャなどが交易品となった。1790年頃からヌートカ人や海岸セーリッシュ人に火器が交易品として入り、武器であるとともに富の象徴となった。1830年頃までにラム酒やタバコが重要な交易品となった。また1800年代には、蜜、米、パンなども交易品としてこの地域に入ってきた (Gibson 1988: 388)。

実用品とは言えない小物や装飾品も、魚、鳥獣の肉、野イチゴ、野菜、水、船のランプに使う鯨油などと交換された。それらは、ビーズ (ネックレスや腕輪に利用)、ボタン、中国銭、スプーン、くぎ、釣り針、鏡、くし、ハンカチなどであった (Gibson 1988: 385-386; 1992: 228)。なお、大量の中国銭がアラスカからオレゴンにかけ

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

ての北西海岸へ流入したのは主に広東との交易によるものであった (Burch 1988: 237; Woodward 1989: 15; Keddie 1990: 4-18)¹¹⁾。中国銭はエトピリカのくちばしと同様に、北西海岸地域の先住民によって儀礼ダンス用エプロンの装飾に利用された (Gloria Webster 談)。また、当初ビーズは、交易品と言うよりも、交易を開始する儀礼的な交換用に使われていた (Gibson 1988: 385-386; 1992: 228)。

4.2.2 内陸毛皮交易期

1793年に、アレクサンダー・マッケンジー (Alexander Mackenzie) は北米大陸の内陸側から西進し、ロッキー山脈を越えて北西海岸に達した (Mackenzie 1973)。この探検から数年後には、モンリオールに基盤を置く北西会社 (North West Company) が本格的に北西海岸へ進出を始めた。そして1805年には、サイモン・フレイザー (Simon Frazer) がロッキー山脈の西、マックレオド湖にある露米商会交易所の南方に最初の恒久的な交易所を開設した (Fisher 1996: 127)。

1821年には、ハドソン湾会社は北西会社を吸収・合併した。ロッキー山脈以西のハドソン湾会社の事業は (現在のオレゴン州にあった) フォート・バンクーバー (Fort Vancouver) の J. マクローリン (John McLoughlin) によって経営され、交易所のネットワークが整備された。それ以降、ハドソン湾会社の北西海岸地域での交易活動が活発になり、海路からの毛皮交易を凌駕するようになった。そして、ハドソン湾会社は1831年にナス川 (Nass River) の河口にチムシアン人を相手とするフォート・シンプソン (Fort Simpson) を開設し、1830年代には交易船を北西海岸の南北に走らせた (Fisher 1996: 127)。

露米商会は、1839年にハドソン湾会社と協定を結び、北緯54度から60度までの北西海岸の沿岸地帯を10年間の期限付きで貸与した (郡山 1980: 287)。ハドソン湾会社は1843年にフォート・ビクトリアをバンクーバー島に開設した。イギリスとアメリカとの間で1846年に締結されたオレゴン条約によって、北緯49度線の国境がロッキー山脈から太平洋まで延長され、バンクーバー島はイギリス領になった (木村 1999: 161)。イギリス政府は1849年にバンクーバー島をハドソン湾会社の植民地とした。同年、ハドソン湾会社はバンクーバー島北部にフォート・ルパート交易所を開設した。同会社は先住民からラッコなどの毛皮を入手する一方、彼らには銅板、毛皮、タバコ、ビーズ、火器、ナイフ、斧などを売った (Burch 1988: 237)。このため地元の先住民クワクワカワク (クワキウトル) 人はヨーロッパ製品を容易に入手することができるようになり、ポトラッチで消費される物資の量が急増し、ポトラッチ自体が肥大化し

た。また、この交易所の近くに複数の親族集団が移住し、社会の再編がなされた（立川 1999a: 168; 1999b: 5）。

4.3 北米北西海岸地域における毛皮交易の諸影響

海から船で北西海岸にやってきた交易者は大半が季節的な訪問者であったため、初期には先住民の諸文化は大きな影響を受けることなく連続的に展開していた（Gibson 1988: 390）。しかし、一方で、海洋毛皮交易とその後の陸路による毛皮交易は北米の北西海岸地域の先住民社会に多大な影響を及ぼした。毛皮交易が北西海岸地域の先住民に及ぼした影響は次のようなものであった。

第一に、毛皮交易から得られる富や物資によって、北西海岸先住民の諸文化は、芸術的な作品の制作や儀礼活動において「黄金時代」を迎えた（Drucker 1943: 27; Fisher 1996: 137）。新しい物資や富の蓄積に伴い、ポトラッチの肥大化や回数の増加が見られた。トーテム・ポールや仮面、鳴り物、木繊維製上着などの木製品の制作が多くなるとともに精巧になった（Drucker 1943, 1948; Wike 1951: 75-79; Codere 1961: 467; Duff 1964a: 57, 59; 1964b）。ポトラッチの増加は、チーフの地位の強化を生み出し（Gibson 1988: 389）、社会の階層差を顕在化させた。

第二に、アルコールやタバコ、火器、伝染病は、先住民の人口を減少させる要因となった（Fisher 1977: 22; Gibson 1988: 390）¹²。伝染病としては、はしか、性病、マラリア、結核、インフルエンザ、百日咳などが、欧米人との接触によって北西海岸地域に持ち込まれた（Fisher 1996: 142）。

第三に、先住民の間に交易仲介者と専門の狩猟者への分化が見られた（Fisher 1977: 11-12）。社会内で交易仲介者と狩猟者への分化が見られることもあれば、グループ全体が交易者となる場合もあった。後者の事例としては、もともと交易者として有名であったチヌーク人があげられる。彼らは他の北西海岸先住民とハドソン湾会社との仲介者的な交易者となった。彼らの間の交易を促進させるために、「チヌーク・ジャーゴン」と呼ばれる混成語が形成され、交易に利用された。この言葉にはチヌーク語、ヌートカ語、フランス語、英語などが入っており、毛皮交易期には北西海岸地域で使用されていた（Fisher 1996: 134）。

5 北米の亜極北地域における交易

ここでは北米の亜極北地域における先住民間交易と毛皮交易について概述する。西

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

はロッキー山脈から東はラブラドルにかけての広大な亜極北地域には、チャーチル川（Churchill River）を境として、その西側にはアサバスカン語族系の人々が、その東側にはアルゴンキン語族系の人々が住んでいた。

この広大な地域には、森林カリブー、ヘラジカ、水鳥、ホワイト・フィッシュ、チョウザメ、イワナ、さらにビーバー、ジャコウネズミ、ホッキョクキツネなどの毛皮獣が生息していた。ヨーロッパ人との接触以降、カナダの亜極北地域の先住民にとって毛皮交易は経済的に重要となった。彼らが住む土地は農耕に適さないので、ヨーロッパ人が入植し、彼らを土地から追い出すことはなかった（A. Ray 1996: 259）。

5.1 毛皮交易期以前

北米大陸の北方内陸部においては、ヨーロッパ人と接触する以前には、先住民が遠隔地間の交易に従事することは少なかった。そのような中で、遠距離交易によって運ばれた例外的な交易品として、五大湖やコパーマイン川地域にある天然銅（native copper）、現在の北部ケベックや北西準州、ヌナウトにあるシリカ（silica）、太平洋側にある黒曜石などがあった（A. Ray 1996: 264）。

例外的に先住民間交易が盛んに行われた地域もあった。オタワ川の上流、ニピシグ湖、ヒューロン湖の北側の地域では、ニピシグ人やオタワ人、オジブワ人の祖先と考えられる人々が、ヒューロン人やペタン人の祖先と考えられる人々と交易のネットワークを持っていた。前者の人々は、農耕民である後者に毛皮、生皮、衣類、スペリオル湖地域から出る天然銅を提供した。それらと交換に前者は後者からキビ、野生タバコ、アライグマの皮革、クロリスのマントなどを得ていた（A. Ray 1996: 265）。

1534年の夏にジャック・カルチエ（Jacques Cartier）がカナダ東岸のラブラドルに到達し、セント・ローレンス湾の北岸でモンタニエ人と思われる獣皮服を着た先住民に遭遇している（A. Ray 1996: 267）。

1580年頃にはバスク人の捕鯨船が年に20隻から30隻、ラブラドル半島の沖にやってくるようになる。彼らはヨーロッパ製品と、先住民が持ってきたシカ、テン、クマ、ビーバー、アザランの毛皮などとの交換を行っていた（A. Ray 1996: 267）。1580年頃にはラブラドル半島の南にあるニューファウンドランドの沖にスペイン、フランス、ポルトガル、イギリスの漁船が多数やってきてタラ漁に従事していた。その後、同地域においては捕鯨が行われるようになった（細川 1999a: 41）。彼らの中には、アルゴンキン語族系の先住民と物々交換をし、毛皮を入手する者もいた（下山 1995: 220-221）。ハロルド・イニスは、新大陸の毛皮交易は「タラ漁の副産物として生まれ

た」(Innis 1978: 53) と述べている。

5.2 毛皮交易期

1580年頃より、ヨーロッパからビーバーの毛皮を求めて交易船がセント・ローレンス湾に到来するようになった (A. Ray 1996: 268)。当初、この交易はタラ漁に付随するものでしかなかったが、ビーバーの毛皮はセント・ローレンス湾のタドウサック (Tadoussac) から民間船でヨーロッパに運ばれた (細川 1999a: 40)。当時、毛皮交易を活発に行っていたのは、ケベックに入植したフランス人たちであった。彼らは罽獵師であるとともに毛皮商人でもあり、奥地へと出向いては自ら罽獵に従事する一方で、先住民と毛皮の取引を行った。彼らは「森の獵師」(coureurs de bois) と呼ばれていた (竹中 1984: 36; 下山 1995: 221-223)。

ケベックのフランス人がセント・ローレンス河から五大湖へ至る交易ルートを支配していた一方、ニュー・アムステルダムの人オランダ人はハドソン河からオールバニーそしてオンタリオ湖へ至る交易ルートを支配していた (Wolf 1982: 161)。ハドソン河沿いの南ルートは、1644年からはイギリス人へと支配が移行した。1670年にはイギリスにおいてハドソン湾会社が設立され、ジェームズ湾地域へ進出し、主要河川の河口に交易所を開設した。

現在のカナダにあたる地域での毛皮交易の歴史については、イニスによる大著がある (Innis 1970)。彼は、カナダにおける毛皮交易の進展を地域と時期を基準として次のように提示している。

大西洋沿岸における毛皮交易の開始 (1497-1600年)

オタワ地域での毛皮交易 (1600-1663年)

五大湖およびハドソン湾における毛皮交易 (1663-1713年)

サスカチュワンおよび北西地域への毛皮交易の拡大 (1713-1763年)

ハドソン湾での交易 (1670-1770年)

大西洋岸から太平洋岸への毛皮交易の拡大 (1763-1821年)

ハドソン湾から太平洋岸への毛皮交易の拡大 (1821-1869年)

この編年を参考にしながら、北米の亜極北地域における毛皮交易の変化を素描してみたい。

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

5.2.1 大西洋沿岸における毛皮交易の開始（1497-1600年）

ヨーロッパ人と最初に交易関係に入ったのは北米大陸東北部に住むアルゴンキン語族系先住民であるミクマク人、モンタニェ人、ナスカピ人、アベナキ人、クリー人らであった。フランス人が毛皮を求めて交易を開始すると、北米先住民たちは彼ら自身の交易ネットワークを作り出し、毛皮や交易品の内陸輸送を独占しようとした。交



地図3 北米亜極北地域および極北地域

易の仲介者となった最初の先住民グループはモンタニエ人やアベナキ人であった。東部の海岸からやってくるフランス人とモンタニエ人はタドウサックで交易を行った（以下、地図3参照）。さらに、モンタニエ人はサン・ジャン湖（Lac St-Jean）でオタワ渓谷から来たオタワ人やイーストメイン・クリー人のグループと会い、フランス人に売る毛皮を手に入れていた（A. Ray 1996: 268）。

このように毛皮交易が開始されると、金属製手斧、ナイフ、武器用の尖頭器、布地、銅製および真鍮製のやかんなどヨーロッパ製品を内陸の交易パートナーの所へ運び、その代わりに毛皮を持ち帰る先住民の交易仲介者が出現した（A. Ray 1996: 272）。この間接交易を通して、1580年頃までにヨーロッパ製品は先住民の手を経て内陸部のジェームズ湾やジョージアン湾周辺まで流通し、1630年代までにはその地域から東側にはあまねくヨーロッパ製品が広まっていた（A. Ray 1996: 271-272）。

5.2.2 オタワ地域における毛皮交易（1600-1663年）

1600年頃、フランス人と主に交易を行っていたモンタニエ人は、毛皮交易の利権を求めていたイロクォイ5民族同盟（モホーク人、オネイダ人、セネカ人、カユウガ人、オノンドガ人からなる同盟）のモホーク人によって交易の妨害を受け始めたので、現在のケベック州地域に入植していたフランス人シャンプレーン（Samuel de Champlain）らに援助を求め、1603年にはアルゴンキン人、マラシット人と連合し、モホーク人に対抗した（A. Ray 1996: 269）。

カナダの東部地域において毛皮獣が減少してくると、毛皮交易は毛皮獣を求めて西進し始めた。1630年代半ばまでに、フランス人との毛皮交易の仲介者の主流は、アルゴンキン人やモンタニエ人からヒューロン人へと代わっていった（A. Ray 1996: 271）。ヒューロン人はアルゴンキン語族系先住民オタワ人、ニピシグ人と連携しながら五大湖、ハドソン湾、セント・ローレンス河流域の先住民と交易のネットワークを形成していた。1616年頃から1649年頃にかけて、ヒューロン人はモントリオールやケベックのフランス人交易者に毛皮を渡し、織布、ビーズ、塗料、ナイフ、斧、やかんを入手していた（Waldman 1985: 75）。

ヨーロッパ人から物資を入手するために必要な毛皮の獲得競争が先住民の間で激しくなるに従い、1600年代半ば、オランダ人の交易パートナーであったイロクォイ5民族同盟の人々がビーバー資源を求めて南方から進出してきたため、アルゴンキン語族系先住民・ヒューロン民族の同盟との争いが激化した（Trigger 1976; Waldman 1985: 75）。一連の争いは、その争いにちなんで「ビーバー戦争」と呼ばれている。

1640年代にはイロクォイ 5 民族同盟の人々が、毛皮獣が豊富に生息していた五大湖北地域ヒューロニア（ヒューロン民族の居住地）を武力によって侵略したために、ヒューロニアは崩壊した。このため1649年からはヒューロン人の代わりに（「森の猟師」と呼ばれた）フランス系の狩猟者や商人が毛皮の採取に従事するようになった（細川 1999a: 54）。また、イロクォイ 5 民族同盟の人々の交易パートナーは、1660年代にはオランダ人からニュー・アムステルダム（ニューヨーク）のイギリス人へと代わった。

ヒューロン人の毛皮交易の仲介者としての役割は、ヒューロニア崩壊後、オタワ人にとって代わられた。1640年代以降、毎夏、スペリオール湖とヒューロン湖の間にあるスー・セント・マリー（Sault Ste. Marie）や、ミシガン湖とヒューロン湖の間にあるミチリマキナク（Michilimackinac）に、西部クリー人、オジブワ人¹³、その他のアルゴンキン語族系先住民、ミネソタやオンタリオから来たスー語族系先住民であるアシニボイン人が、冬に獲ったビーバーの毛皮を持参して、オタワ人と交易を行った。オタワ人は、毛皮と交換に、フランス人交易者から入手したナイフ、斧、銃、弾薬、布地、紅茶、タバコ、小麦粉を交易にきた他の先住民に渡した。1680年頃、フランス人が入手した毛皮の3分の2は、オタワ人の手を通して集められたものであった（Ke-hoe 1992: 245）。

さらに西方のニピゴン湖（Lake Nipigon）の近くでは、西部クリー人、アシニボイン人が、ニピシグ人やおジブワ人の交易者と交易を行っていた。この交易のネットワークは北東へとのび、ジェームズ湾まで到達していた。そして1660年頃にはジェームズ湾の東側において、モンタニュ人がケベック州北西部地域のイーストメイン・クリー人が住む地域からラブラドルに至る全地域で交易を行うようになっていた（A. Ray 1996: 275）。このような交易を通して、17世紀半ばまでには北米亜極北地域東部の先住民は日常生活道具・用品をヨーロッパ製品に依存するようになった。

北米亜極北地域東部では、毛皮資源の獲得をめぐる、イロクォイ 5 民族同盟とオタワ人が、さらにイギリス人とフランス人が対立しながら、17世紀半ばから1763年のパリ条約締結まで約1世紀にわたり競合し続けた。イロクォイ 5 民族同盟の人々は、イギリス人とフランス人の反目関係を利用して、自らの政治・経済的な立場を確保した時期があったが、毛皮交易の仲介者の役割を独占することはできなかった（White 1991）。

毛皮交易の副産物として1630年頃から1670年頃にかけてカナダ東部では伝染病が広がった（A. Ray 1996: 273）。1634年にははしか、1636年から1637年にかけてはイン

フルエンザと猩紅熱、1639年には天然痘が流行したことが知られている。これらの伝染病は先住民の人口減少を招来した。

5.2.3 五大湖およびハドソン湾における毛皮交易（1663-1713年）

1670年5月2日、イギリスのチャールズ2世から憲章が与えられ、ハドソン湾会社がイギリスで創設された。この会社の目的は、ハドソン湾およびジェームズ湾に注ぐ河川の流域の領有、同地域の調査や地図の作成、同地域での毛皮の獲得などであった。同社が支配する領域は初代総督ルパート王子にちなんで「ルパート・ランド」(Rupert's Land)と名づけられた。これによりイギリス人が北米先住民との交易に直接乗り出すことになった。

ハドソン湾会社は、16世紀から北米大陸で毛皮交易を行っていたフランス人のやり方を模倣し、「ギフト交換とバーター交易」を採用した。交易関係や政治的な同盟関係を作り出したり、更新するために、交易が行われる前に贈り物の儀礼的な交換を行った。先住民の交易グループのリーダー（キャプテン）には、帽子、ジャケット、ズボンなどが提供された。さらに彼と彼のメンバーは、ビスケット、プルーン、タバコ、ラム酒を受け取った。次に、交易所の支配人が歓迎の辞を述べ、友好関係を確認するパイプタバコをすう儀式がおわると、先住民のリーダーが数枚の毛皮を支配人に贈呈した。この儀礼的な交換の後、交易が開始された (A. Ray 1974: 137, 1996: 276-277; Ray and Freeman 1978: 55-59)。交易は一種のバーターであったが、換算の尺度としてビーバーの毛皮 (MB: made beaver) が利用された。

1670年頃からハドソン湾会社はハドソン湾の奥にあるジェームズ湾に進出し、ケベックの内陸部からやってくるフランス人の毛皮交易者と競合しながら、その地域に住むクリー人やイヌイト人の一部を相手に毛皮交易を開始した。交易の主な対象はビーバーの毛皮であった (Francis and Morantz 1983; Morantz 1983)。ハドソン湾会社は、ジェームズ湾やハドソン湾に注ぎ込む川の河口や上流の要所に毛皮交易所を開設した。ハドソン湾会社は、最初にジェームズ湾へ進出し、その地域に交易所を次々に開設し、クリー人と直接交易を始めた。1668年にはルパート川にチャールズ・フォート (Charles Fort)、1673年にはムース川にムース・ファクトリー (Moose Factory)、1675年にはオールバニー川にフォート・オールバニー (Fort Albany)、1682年にはヘイズ川にヨーク・ファクトリー (York Factory)、1685年にはセブン川にチャーチル・フォート (Churchill Fort) を開設した (A. Ray 1988) (地図3参照)。

ヨーク・ファクトリーは特に重要な交易所になった。ヘイズ川はカヌーを利用して

のほれば、内陸奥地にまでたどり着くことができる (Morse 1984)。ハドソン湾会社は毛皮の交易相手を求めて、西進し、1715年にはアサバスカ川に達した。地の利を得たウイネグ湖周辺のアシニボイン人や西部クリー人は、他の先住民と交易所との仲介交易者として内陸交易を約1世紀にわたり支配した (A. Ray 1996: 278-279)。この結果、ブラックフット人など平原地域の先住民は、ヨーク・ファクトリーに交易を目的として訪れることがなくなった。また、西部クリー人が交易の仲介者となったために、モンタニエ人、オワタ人、オジブワ人はハドソン湾会社との交易の仲介者としての役割を失った (A. Ray 1996: 279)。イギリスとフランスは毛皮交易をめぐる対立していたため、アシニボイン人や西部クリー人はその対立関係をうまく利用して毛皮の取引を行い、利益をあげていた (A. Ray 1996: 282)。17世紀末には、ハドソン湾会社の交易所における交易で銃器を得た西部クリー人やアシニボイン人が、毛皮交易に係わる活動領域を拡大させた。

1694年頃から1720年頃にかけて、西部クリー人はチペワヤン人やビーバー人と戦い、彼らをかなり西の方へ後退させた (A. Ray 1996: 279)。

5.2.4 サスカチュワンおよび北西地域への毛皮交易の拡大 (1713-1763年)

1713年にイスパニア王位継承戦争が終結し、ユトレヒト条約が締結された結果、フランス人はジェームズ湾およびハドソン湾地域から撤退した。しかし、彼らは中部および西部亜極北地域のルバーツ・ランドの内陸部に毛皮交易者を派遣する権利は保持していた (A. Ray 1974, 1996: 281; Ray and Freeman 1978)。1717年にフォート・チャーチル (Fort Churchill, 別名プリンス・オブ・ウエールズ交易所) が新設されると、チペワヤン人が西部クリー人を東へと押し戻し、交易の仲介者としてイエローナイフ人やドグリブ人から毛皮を集め、交易にくるようになった (新保 1993: 69)。そして1763年以降には、カナダの中西部亜極北地域に住むイエローナイフ人やドグリブ人が、チペワヤン人同様にハドソン湾会社との交易の仲介者としての役割を果たすようになった (A. Ray 1996: 279)。

ハドソン湾会社は食料やワナ具など罫猟に必要な物資を先住民に前貸しする制度 (credit system) を採用した (A. Ray 1996: 286)。この前貸し制度は、特定の先住民を特定の交易所で取引させるための制度であった。交易人は、相手の先住民が翌年交易所にもたらすことができるだろう毛皮の数をこれまでの実績に基づいて予想し、それを上限額として罫猟や罫猟に必要な物資や食料の信用貸しを行った。時々、交易人

はその負債を先住民から回収できないこともあった (Ray and Freeman 1978: 186; Francis and Morantz 1983: 51)。ハドソン湾会社とフランス系の毛皮商人との間で先住民を相手に毛皮の獲得競争が熾烈になった1750年代には、ムース・ファクトリーなどの交易所では前貸しの額が急増したことが知られている (Ray and Freeman 1978: 186)。ハドソン湾会社の取引品は、火器と弾薬、衣服用布地と毛布 (1700年代半ばに重要になる)、金属製の斧、手斧、ナイフ、やかん、ブランデー、タバコ (ブラジル・タバコ) であった (A. Ray 1996: 288-289)。

北米亜極北地域中部および西部においては、毛皮交易が盛んになるに従い、ヨーロッパ人 (特に、フランス人) の交易者と先住民女性との間に生まれた人々は「メティ (ス)」 (Metis) と呼ばれる集団を形成した。その中には交易所の近くに住み着き、交易所のために食料の確保や物資運送の手伝いをする「ホーム・ガード」 (home guard) と呼ばれる先住民が出現した (Panneboek 1986)。

フレンチ・インディアン戦争 (1756-1763年) に敗北し、フランス人がカナダの北方内陸部から撤退し始めた1763年頃には、西はロッキー山脈、北はグレート・スレーブ湖やグレート・ベアー湖付近まで毛皮交易は広がっていた (A. Ray 1996: 287)。18世紀の半ばには毛皮交易に変化が見られ始めた。それまでハドソン湾会社の毛皮交易者は海岸から河川や湖を利用して内陸部へ到達していたため、交易所は河川沿いか海岸部の河口に開設されていた。そこへ先住民の仲介者が毛皮を集めて持ってきていた。しかし内陸交易ルート網が整備されてきた結果、ハドソン湾会社は交易所を内陸部の各地に開設し、先住民の仲介者を介さずに地元の先住民と直接に毛皮交易に乗り出すようになり、これまで毛皮交易の仲介者として活躍してきた先住民のグループは、その役割を失っていった。例えば、仲介者としての役割を失った西部クリー人やアシニボイン人の一部は、大平原の近くへと移動し、野牛狩りに従事するようになった。

5.2.5 大西洋岸から太平洋岸への毛皮交易の拡大 (1763-1821年)

フレンチ・インディアン戦争においてイギリスが勝利し、1763年にパリ条約が結ばれた。この結果、フランスが北米からほぼ撤退し、ヌーヴェル・フランスはケベック植民地と改称され、イギリスの植民地となった。この年はイギリスの経済的支配圏が世界全体へと拡大した年であった。1763年から約60年間、ハドソン湾会社はモンリオールに本拠を置くイギリス系の毛皮交易者ノー・ウェスターズ (Nor' Westers) と競合関係にあり、熾烈な毛皮獲得合戦が行われた (下山 1996: 246-253)。

ハドソン湾会社は、モンリオールに基盤を置く交易者ノー・ウェスターズに対抗

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

するために、1774年に最初の内陸部の交易所としてカンバーランド・ハウス（Cumberland House）を開設した（A. Ray 1996: 294）。一方、ノー・ウェスターズのピーター・ポンド（Peter Pond）は、1778年にアサバスカ川の下流に小さな交易所を開設した。モンリオールのノー・ウェスターズの交易者たちは、1779年と1780年にそれぞれ1年の期限付きで北西会社（North West Company）を結社した。それは1783年に再結成され、ハドソン湾会社と合併する1821年まで五大湖地域を中心に毛皮交易を行った（Eccles 1988: 332; 下山 1996: 250）。1780年代には毛皮はカナダの総輸出量の半分を占め、1776年のアメリカ革命後はオールバニーではなくモンリオールが対イギリス毛皮輸出の中心地となった（木村 1999: 128）。

毛皮交易の競合関係は、ハドソン湾会社と北西会社が1821年に合併することによって終結した。新会社は前者の名前をとった。イギリス政府は、この新生会社であるハドソン湾会社に、ルパーツ・ランドと北西地域（マッケンジー地域と太平洋沿岸）での毛皮交易を20年間独占することができる権利を付与した（A. Ray 1996: 300）。

5.2.6 ハドソン湾から太平洋岸への毛皮交易の拡大（1821-1869年）

すでに述べたように18世紀の後半から19世紀の前半にかけて、アメリカ東部のボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアの商人は、北米北西海岸で入手したラッコの毛皮を中国の広東に持っていき、莫大な利益をあげていた。この流れの中で、19世紀の初めにはアメリカの毛皮商業が拡大した（下山 1997）。1808年には J. J. アスター（Astor）がアメリカ毛皮商会（American Fur Company）を設立し、主にオレゴン州や五大湖周辺から毛皮を入手した。また、1809年にはシュトー一家（the Chouteau）がセント・ルイス・ミズリー毛皮商会（St. Louis Missouri Fur Company）を設立した。これらの動きを反映して、アメリカ議会はイギリス人の毛皮交易者をアメリカから締め出す法律を1816年に施行した。国際的な毛皮交易が衰退する1840年代まで、イギリス領カナダとアメリカは毛皮をめぐる対立関係にあった（Waldman 1985: 78）。

1820年代には、ビーバー資源の減少を憂慮したハドソン湾会社は、対アメリカ策をとるとともに、ビーバー資源の保護策を実施した。1820年代から1830年代にかけて、ハドソン湾会社は、アメリカの毛皮交易者や罟猟師が北上してカナダ側の毛皮資源を取ることを防止するために、国境地帯の毛皮獣を取り尽くし、アメリカ人が進入してこないようにした（A. Ray 1996: 300）。さらに1820年代には次のような策を採用した（A. Ray 1996: 301）。

第一に、ビーバーの数の少ない地域の交易所を閉鎖し、ビーバーの数が多い地域に新しい交易所を開設した。第二に、可能な地域では、ジャコウネズミなどビーバー以外の毛皮獣を捕るようと先住民のハンターに奨励した。第三に、価値の低い夏の毛皮を先住民に捕らせないように、罾猟の解禁期と禁猟期をもうけた。第四に、アメリカとの国境沿いの地域を除いて、鉄製器具を先住民に販売することを1822年に禁止した。そして第五に、1826年には捕獲頭数割り当て制を導入した (A. Ray 1975)。

しかし、交易所の交易人も先住民も自己の利益を最大にしようと毛皮獣をとり続けたために、捕獲頭数割り当て制は有効に機能しなかった。このためハドソン湾会社は1839年に方針を変更し、ビーバーの捕獲頭数割り当て数を減少させ、これを守らなかった交易人を解雇することにした。この結果、1840年代にはビーバーの数が増加し、1844年にはハドソン湾会社はその制限を撤廃した (A. Ray 1996: 301-302)。

1800年代に入り、毛皮獣が減少するに従って、ジェームズ湾、ハドソン湾、ウイネペグ湖の間の地域では、先住民の間にテリトリー意識や侵入の意識が出現し始めた (A. Ray 1996: 290, 298)。そして森林カリブーやヘラジカの減少とともに、家族狩猟テリトリー制度¹⁴⁾が出現した (A. Ray 1996: 302)。この制度の起源については諸説があるが、フェイトによると、(現)ケベック州のジェームズ湾地域に住むクリー人は、現在でもこの制度を利用し、冬場のビーバーの罾猟を行っており、社会関係の生業活動や食物分配の実践を通して再生産されている、と言う (Feit 1991)。この事例は北米亜極北地域の先住民社会においては例外的ではあるが、毛皮交易と社会の再生産が両立し得た事例である。

1839年にハドソン湾会社は、極北地域を除く大西洋側から太平洋側に至るカナダの全地域に交易所を展開した (A. Ray 1996: 300)。ハドソン湾会社が実質的にカナダに毛皮交易を独占した1821年から1870年頃には、酒類の販売をやめ、紅茶や小麦粉を先住民に売ようになった。19世紀の終わりには、小麦粉で作った無発酵パン (パノク) が多くのカナダ先住民の主食になった。

5.3 北米の亜極北地域における毛皮交易の諸影響

北米の亜極北地域にある先住民諸社会に毛皮交易が及ぼした諸影響を要約すれば、次の通りである。

第一に、ヨーロッパ人の間や先住民の間に見られた毛皮資源の獲得をめぐる争いは、先住民間の争いや、ビーバー戦争やフレンチ・インディアン戦争など植民地戦争の要因のひとつになった (Trigger 1976)。

第二に、先住民の中に、内陸の先住民と西欧人との間で行われた毛皮交易の仲介者となる者が出現した。それらの先住民のグループは、他の先住民グループと敵対したり、同盟を結びながら、毛皮交易のネットワークを支配しようとした。この過程で、グループの移動や社会的な再編成が見られた。また、北米の亜極北東部地域には家族狩猟テリトリー制度が出現した。

第三に、毛皮交易の副産物として、外来のはしか、インフルエンザ、猩紅熱、天然痘などが先住民の間で流行し、先住民人口が激減した。

第四に、現在のカナダの中部および西部にあたる地域では、主にフランス人やフランス系カナダ人と先住民との結婚や混血化により、「ホーム・ガード」と呼ばれる、交易所の近くに住み、食料を交易所に供給し、毛皮の運搬を手伝う先住民が出現した。さらに「メティス」と呼ばれる、ヨーロッパ人と先住民が混血化した先住民グループが形成された (Panneboek 1987)。

第五に、毛皮交易はカナダの東部から西部へと徐々に拡大したが、交易所が設置された範囲がカナダの国土の母胎となった。この交易の歴史的な展開を通して、イギリス系移民とフランス系移民を中心とするカナダという国家が形成されたが、先住民の諸グループは政治・経済的にその体制の中に組み込まれてしまった。毛皮交易への参加によって形成された北米先住民のグループはエスニック集団として認知されるようになった (Wolf 1982: 194)。

第六に、北米亜極北地域においては毛皮交易が先住民社会を大きく変容させたが、(現) ケック州北部のクリー人のように毛皮交易に係わりながらも家族狩猟テリトリー・システムを利用しながら社会関係を維持させてきた事例が存在する。

6 北米の中部および東部極北地域における交易

ここではカナダの中部および東部極北圏に住むイヌイット人の交易について述べる。ラブラドルやジェームズ湾地域、ハドソン湾西岸のチャーチル (Churchill) 周辺に住むイヌイット人を除けば¹⁵⁾、極北地域のイヌイット人が本格的に毛皮交易に係わり始めたのは1910年代以降である。

6.1 毛皮交易期以前

カナダ極北地域の先史時代における交易についてはあまり研究がなされていない (例えば, Stefansson 1914; McCartney 1977, 1991; Gramly 1978; Jordan 1978;

Jacobs and Stenton 1985; Kaplan 1985; Morrison 1987, 1991; Savelle 1989; Barr 1994)。

紀元後1000年頃には、ノース人と呼ばれる北欧人がラブラドルやバフィン島にやってきていたことが知られているが、この接触がイヌイット社会に及ぼした影響がどの程度のものであったかは詳細には明らかにされていない (McGhee 1984)。

むしろヨーロッパから来た漁民、探検隊、捕鯨者との接触は、物資や食料の交換、病気の伝染をともなったために、その社会的影響は甚大であった。15世紀にはいると、ポルトガルやバスクなどヨーロッパの漁民がタラ漁や捕鯨を行うためにカナダの北東部沿岸地域にやってくるようになった。さらに16世紀以降は、フロビッシャー (J. Forbisher, 1576年) やデイヴィス (J. Davis, 1585年)、ロス (J. Ross, 1818年, 1829-1832年)、ペリー (W. E. Parry, 1819年)、シンプソン (T. Simpson, 1836-1839年)、ラエ (J. Rae, 1845-1846年)、フランクリン (J. Franklin, 1845-1848年) ら探検家が、ヨーロッパとアジアを結ぶ新たな航路を探しに続々とカナダ極北地域に入ってきた (Neatby 1984)。

16世紀の半ばからデイヴィス海峡でニューファウンドランドから来た捕鯨者がホッキョククジラを捕獲し始めた。ラブラドル沿岸に住むイヌイットはヨーロッパから来た漁民や捕鯨者と散発的ながら交易をするようになった。そしてラブラドルでは、18世紀に複数の家族が集住する大型家屋が出現する。この現象はアリュートの場合に酷似しており、ヨーロッパ人との交易の進展や交易仲介者の出現と深く関わっていると考えられている (手塚 1999)。

カナダの中部および東部極北地域に住むイヌイット人は、1910年以前には漁業や探検、捕鯨のためにやってきた欧米人と時折接触することがあり、銃や鉄製の道具などを入手していたが、欧米人を經由していろいろな伝染病 (例えば、結核、はしか、風邪、梅毒) もイヌイット社会に持ち込まれた。この伝染病のために、イヌイット社会では多数の死者を出し、20世紀の中頃まで人口の減少が続いた。イヌイット社会では、伝染病の蔓延による人口の減少は、毛皮交易に深く係わり始める以前から存在していた。例えば、東部極北地域に住むラブラドル・イヌイットの間では、捕鯨者、宣教師、タラ漁民との接触によって伝染病が広まり、人口が減少した。推定によると、1773年に1625人であった人口が、1829年には806人まで減少していた。その後、人口は回復し、1840年代には1065人ほどになった (Damas 1996: 355)。西部極北のマッケンジー地域では、19世紀半ばには人口は2000人から2500人であったと推定されているが、捕鯨期が終わりを告げる20世紀の初頭には200人から300人に減少していた

(Damas 1996: 363)。これらの人口減少は、彼らが本格的に毛皮交易に参加する以前に始まっていた。

すでにアラスカ地域の先住民間交易のところで言及したように、アラスカ方面からカナダの西部極北地域にシベリア産の鉄が入ってきていることが知られている。この交易のネットワークは18世紀末以前から存在していたと考えられている (Damas 1996: 349)。

ラスムッセンがカナダ中部極北のペリー・ベイ地域に住むイヌイット人に出会った1920年頃には、ヨーロッパ人とはほとんど直接的な接触をしていなかったにもかかわらず火器などを持っていたことから、イヌイット人の間に交易のネットワークが存在していたことが推定されている (Rasmussen 1931)。ハドソン湾西岸のチャーチルには1717年にハドソン湾会社が交易所を開設し、チベワヤン人やイヌイット人を相手に交易を行っており、ここから入ってくるヨーロッパ製品や物質が先住民間交易を刺激したらしい (Damas 1996: 350)。

6.2 毛皮交易期

ヨーロッパからやってきた探検家や漁民、捕鯨者、宣教師、毛皮商人との接触の仕方や時期は、カナダ・イヌイットの社会ごとにかかなりの差異があり、イヌイット人への影響や反応の様相も異なっていた。

カナダの東部および中部極北地域に住むイヌイットは今世紀に入り捕鯨者とホッキョクキツネの毛皮を交易し始めたが、その取引量はそれほど多くはなかった。例えば、カナダ東部極北地域では1900年から1915年にかけての期間に捕鯨者を相手に3,924枚のホッキョクキツネの毛皮の交易がなされている。この総数は1920年代におけるひとつの交易所の1年分の取引量に相当する程度であった (Damas 1996: 376)。

極北圏での欧米人による捕鯨が衰退するとともに、1910年代にはハドソン湾会社をはじめとする交易会社や交易者がカナダの東部極北地域へと進出し、ホッキョクキツネの毛皮交易をイヌイット人相手に開始した。ハドソン湾会社は、1925年までに東部極北地域に数十ヶ所の交易所を設置し、毛皮交易のためのネットワークを形成し、多数のイヌイット人を毛皮交易システムの中に取り込んでいった (Usher 1971)。1920年代には毛皮の価格が高騰したこともあって、極北地域における毛皮交易は最盛期に達した。当時、極北地域にはイギリス系のパフィン交易商会、フランス系の会社「リヴィヨン・フレール」、小規模な個人経営交易商が、ホッキョクキツネの毛皮の獲得をめぐるハドソン湾会社と競合していた。

イヌイット人は、ホッキョクキツネの毛皮(1960年代以降はアザランの毛皮が加わった)を交易者に売り、ライフル、カヌー、鉄器、食料などを購入した。20世紀に入ってから極北地域におけるハドソン湾会社のイヌイット人との毛皮交易は、17世紀の亜極北地域の先住民の場合とは異なり、最初から交通の要所に交易所を開設し、先住民を仲介者とせずイヌイット人と直接交易をするやり方を採用した。

ハドソン湾会社は、カナダの極北地域の各地にある交易所に、毎夏、年に1度、船で必要な物資や交易品を搬送するとともに、前年集めた毛皮をカナダ南部へと持ち帰った。交易人は交易所に常駐し、初冬から翌年の初春にかけてイヌイット人が交易所に持ち込んでくる毛皮を受け取り、ライフル、木製小型ボート、漁網、やかん、はさみ、ナイフ、針、鉄製ワナ具、砂糖、生地、紅茶、弾薬、干しぶどう、小麦粉などをイヌイット人に売った。この際、交換の尺度としては、ビーバーの毛皮ではなく、ハドソン湾会社私製コインが使用された(Graburn 1969: 125-126)。

ハドソン湾会社が亜極北地域で先住民と毛皮交易を行う時に採用した「前貸し制度」が極北地域においても実施された。ハドソン湾会社の交易人は、秋にホッキョクキツネの罫猟のためにキャンプ地へ出発したいイヌイット人が食料や必要な物資を持っていない場合には、前年の毛皮獲得実績に基づいてハンターを評価し、翌年の春までにハンターが交易所に持ってくるができるだろうと予想される毛皮の数に相当する金額を上限として食料や物資の前貸しを行った。このような前貸し制度が実施されたために、イヌイット人は特定の交易所で交易をするようになった。

イヌイット人は、このハドソン湾会社の特定の交易所との交易を通して、家族や親族、キャンプ集団とは異なる次元のアイデンティティを形成した。例えば、ハドソン湾東北岸の沖合にあるケープ・スミス島の交易所で交易をしていたイヌイット人は、自他ともにケープ・スミス・イヌイット人と名乗るようになった(岸上 1990)。

イヌイット人が冬期のホッキョクキツネ罫猟を中心的な生業活動にするに従って、交易所への経済的依存が進み、外部の市場経済への接合が加速された。さらに、罫猟やライフル猟、網漁は個人的な食料獲得活動であるため、拡大家族間の協力の必要性を低下させ、各世帯集団の経済的自立化を進めたのであった。しかし、ここで強調しておきたい点は、イヌイットの生業活動や親族関係は基本的に1980年代までは再生産されていたことである(Wenzel 1991; 岸上 1996a; 1996b; 1998)。イヌイット人が1910年代から係わったホッキョクキツネの罫猟は、イヌイット人の移動ルートなどを変更させた一方で、狩猟地や時期においてアザラン猟やホッキョクイワナ漁と矛盾する活動ではなかった。むしろ、夏場の食料獲得の成果と冬用食料の貯蔵がホッキョク

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

キツネの毳猟に専念できるかどうかを決定する要因であった(岸上 1990)。1960年代からアザラン皮が毛皮交易の品目に加わり、1983年頃までは中心的な交易品となった。イヌイット人はアザランを捕獲し、その肉を食料として分配、消費し、その毛皮は毛皮商人か生協に売り、現金を得た。その現金で、狩猟・漁労や毳猟に必要な道具や部品、携帯用の食料品、雑貨品を購入し、生業活動を続けることができた。彼らの狩猟・漁労活動や獲物の分配、消費は、主に拡大家族関係に則って組織され、実践されてきたために、それらの活動を通して拡大家族関係が維持され、再生産されてきたのである。このため、イヌイット人の社会関係は毛皮交易を行うことによって大変化を被ったと言うよりは、再生産されてきたと言うことができる。

イヌイット人の毛皮交易を歴史的に概観した場合、2つの時期が経済的に重要であった。大恐慌や第二次世界大戦による高級毛皮の価格の低迷などが見られたものの、1920年代から1960年代までは、イヌイット人の主な交易品はホッキョクキツネの毛皮であった。第二次世界大戦後、毛皮交易は停滞していたものの、1961年にノルウェーでアザランの毛皮の鞣し技術が開発されたのが契機となって、イヌイット人にとってアザランの毛皮が新たな交易品となった。その毛皮はヨーロッパ共同体が輸入を禁止し、毛皮市場が崩壊する1983年まで、イヌイット人の現金収入源のひとつであった(Wenzel 1996: 133-135)。1983年以降はイヌイット人の毛皮交易は実質的に行われなくなり、イヌイット人は重要な現金収入源をひとつ失うことになった(Wenzel 1991)。

6.3 北米の中部および東部極北地域における毛皮交易の諸影響

ハドソン湾西岸のチャーチルには1717年に、同湾東岸のグレート・ホエール・リヴァーには1837年に、ハドソン湾会社の交易所が設置され、イヌイットを相手に毛皮交易が行われていたが、これらの交易は例外的な存在であった。アラスカとカナダの国境にあたるマッケンジー・デルタ地域やその周辺部では、捕鯨者の流入により先住民の人口が減少していたが、ミンク、ビーバー、ジャコウネズミなどが豊富に生息していることもあって、毛皮交易期になるとアラスカから白人やアサバスカン語族系先住民の人々が移入してきた(Damas 1996: 369)。北米の中部および東部極北地域に住むイヌイット人は、他の先住民と比べ、毛皮交易に係わり始める時期が1910年代以降と遅かった。毛皮交易は、亜極北地域の先住民の場合とは異なる影響をイヌイット社会に及ぼした。

第一に、1910年代に、東部極北のヌナヴィク地域などでは、近くに海獣狩猟場があ

る良い罨猟場を求めて親族集団の移動が見られた（岸上 1990）。

第二に、キャンプ形態に変化が見られた。イヌイット人は、冬季にホッキョクキツネの罨猟を行うために分散した小型のキャンプ集団を形成し始め、アザランの呼吸穴罨猟を行うための大型のキャンプ集団を形成することが少なくなった。この小型のキャンプ集団は、移動や罨猟に利用するピーターヘッド・ボート（木製大型ボート）を集団で購入することがあった。

第三に、特定の交易所と交易を行うようになったイヌイット人は、その交易所との関係からそれまでには見られなかった次元のアイデンティティを形成した。

第四に、毛皮交易が進展するに従い、イヌイット人による交易所への経済的な依存が進み、外部の市場経済への接合が加速された。外部社会の経済状況が、イヌイット人の経済生活に大きな影響を及ぼすようになった。しかし、イヌイット人の場合、ホッキョクキツネの罨猟やアザラン罨猟に経済活動を特化せず、食料の獲得を自らの手で行ってきた。

第五に、毛皮交易を通して得たライフルや（1960年代以降は）スノーモービルなどを利用することによって、拡大家族間の協力の必要性が低下し、各世帯集団の経済的な自立化が進んできた。しかしその一方で、罨猟・漁労活動や食物分配の実践を通してイヌイットの罨猟・漁労活動の重要性や親族関係は、変化を被りながらも再生産されていた（Wenzel 1991; 岸上 1998）。

7 北米北方地域における毛皮交易と先住民の社会変化

本稿では、北米の北方地域を4つの下位地域に分け、ヨーロッパ人との接触前後の先住民間交易、16世紀から19世紀にかけての時期を中心とした毛皮交易を概観してきた。毛皮交易の先住民社会に及ぼした影響については地域差が見られる一方で、共通点も見られる。

15世紀半ば以降のヨーロッパ社会の繁栄は、ヨーロッパ人にクロテンやテンの毛皮など贅沢品の需要を生み出した。この需要を満たすべく、航海技術や陸上交通の発展に影響されながらヨーロッパ人は毛皮資源が豊富であった地域へ進出した。すなわち、ロシア人はクロテンの毛皮を求めてヨーロッパから東進し、シベリアを横断した。さらにラッコやアザランの毛皮資源を求めて新大陸の北西海岸へ到達した。一方、フランス人やイギリス人は大西洋を横断し、1500年代よりビーバーの毛皮を求めて新大陸の東岸から西進し北西海岸へと到達した（地図1および年表1参照）。シベリアのク

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

ロテンや北米のビーバーの毛皮は、主にヨーロッパに送られた。そして1780年代から1840年代にかけては、北米の北西海岸地域において、西から来たロシア人、東から来たアメリカ人とイギリス人がラッコの毛皮の獲得をめぐる競争を繰り広げた。これら北米産のラッコ皮は中国（清朝）の市場へ輸出された。

広域をつつみ込む毛皮交易のシステムがヨーロッパ市場と中国市場を中心に形成されていく過程で、シベリアや新大陸に住む先住民は毛皮交易を通して資本主義の経済システムに巻き込まれ、大規模な社会変化を余儀なくされていったのである。地球規模で展開された毛皮交易はロシアやイギリスなどヨーロッパの諸国に巨大な富をもたらした一方で、当初は毛皮交易によって栄えた先住民諸社会の大多数が長期的には大変化することとなった。特に、毛皮交易の終焉は多くの北米北方民に経済的苦難を残した。

ウルフは、北米先住民がヨーロッパ人による毛皮交易に係わることによって体験した社会変化について、次のように一般化している。北米先住民は、毛皮交易が進展していくとともに、罾猟と狩猟・漁労の道具（生産手段）や食料を交易所に依存するようになり、多くのハンターは毛皮の罾猟やそれを補助する仕事に特化した。この結果、彼らは生業活動に携わらなくなり、毛皮交易のシステムの中で特殊な役割を担う労働者になった、と言う（Wolf 1982: 194）。すなわち、北米先住民は生産手段をコントロールできる主体からそれを奪われた労働者になり、その変化の過程で社会も質的な変化（社会の崩壊）を余儀なくされたのである。

ここでは、毛皮交易に起因すると考えられている社会変化のタイプおよび毛皮交易と階層化との関係について若干の検討を加える。

7.1 毛皮交易と社会変化

北米北方地域の先住民の社会変化（の結果）を毛皮交易との関連で見ると、4つのタイプに大別できる。

第一のタイプは、「消滅」という社会変化である。ヨーロッパ人との毛皮交易に係わった結果、争いや伝染病のために消滅した先住民のグループが存在している。この例としては、北米東北部ニューファウンドランドに住んでいたベトク人（Boethuk）があげられる。

消滅せず生き残ったグループは、交易の様態によって3タイプの変化のいずれかを体験した。北米北方地域で見られたヨーロッパ人の毛皮交易は、支配型交易と自由競争型交易の2つに大別できる¹⁶⁾。前者は主にロシア人によって、後者は主にそれ以外

のヨーロッパ人によって行われた。アリュート人やコディアク人に対してロシア人が行った強制的・搾取的な支配型交易は、強制移住と過酷な労働、疫病やアルコールの蔓延によって人口を急激に減少させ、先住民社会を崩壊へと導くような変化を生み出した。これが社会変化の第二のタイプ「崩壊」である。

自由競争型の毛皮交易が実施された地域では、交易が開始された直後は、先住民とヨーロッパ人の毛皮交易者や先住民の毛皮交易仲介者の関係は相互に利益を生み出し、互恵的であった。ロシア人やアメリカ人と交易したトリングット人や、イギリス人やフランス人と交易したイロクォイ5民族同盟の人々のように、先住民が相互に競合関係にあるヨーロッパ人の交易相手を2グループ有していた場合には、対立関係を巧みに利用して先住民側はかなりの利益をあげていた。しかし、時間がたつとともに、毛皮獣を専門に狩猟する者や交易仲介者になる者など、毛皮交易活動に特化し、外部の交易者に食料の大半を依存する先住民グループと、そうでないグループとの間に社会変化の相違が見られ始めた。

毛皮交易に経済活動を特化した先住民グループの場合には、毛皮交易の進展によって、先住民社会のグループ内に交易の仲介者や仲介者グループが出現し、毛皮交易に有利な場所を求めて移動するグループ、他のグループの進出によって故地を離れざるを得なかったグループが出現し、グループの移動や混交によって社会の再編成が起こった (A. Ray 1974; Ray and Freeman 1978)。すなわち、毛皮交易が進展していくに従い、各グループの役割が変化することによって、社会が大きく変化し、再編を余儀なくされてきたのである。これが第三の社会変化のタイプ「大変化」である。この例としては、ラブラドルのイヌイット人、ヒューロン人、アベナキ人、西部クリー人らがあげられる。

一方、毛皮交易のみに経済活動を特化することがなかった先住民のグループの場合には、食料獲得のための狩猟・漁労活動が維持され、その方法や食物分配も堅持されたことから、社会は変化を被りつつも再生産を続けることができた。これが第四の社会変化のタイプ「再生産的变化」である。この事例としては、現在のカナダ・ヌナウト/ヌナヴィク地域に住むイヌイット人 (Wenzel 1991; 岸上 1996a, 1996b, 1998) や (現) ケベック州北部のクリー人 (Feit 1991), アラスカのユッピック人 (Fienup-Riordan 1983; Langdon 1991) らがあげられる。イヌイット人やクリー人らの事例は、毛皮交易に係わりながらも生産手段をコントロールし得た事例であり、他の亜極北地域や平原地域、北西海岸地域の先住民の場合とは異なる。

北米北方地域の先住民社会において毛皮交易が一因で引き起こされた社会変化を、

表2 先住民社会の変化のタイプと毛皮交易のタイプ

変化のタイプ	(1) 消滅	(2) 崩壊	(3) 大変化	(4) 再生産
交易のタイプと経済特化の有無	軍事的な征服 (や伝染病) による	支配型交易	自由型交易 交易に経済特化	自由型交易 交易に特化せず
事例	ベトク人	アリュート人 コディアク人	オジブワ人, ヒューロン人, アベナキ人, 西部クリー人	ヌナウトとヌナヴ ィクのイヌイト 人, 北ケベックの クリー人
ウルフの仮説 (1981)		部分的に仮説 を支持	仮説を支持	仮説を支持せず

結果として見れば(1)消滅、(2)崩壊、(3)大変化、(4)再生産的变化の4つのパターンに大別できる(cf. Spicer 1961)。個々の先住民社会の変化は(1)と(4)を両極端とするひとつの連続体のどこかに位置することになるが、ここでは社会変化の4つのタイプを提示する(表2参照)。ヨーロッパ人との毛皮交易の様態、地理的・生態的な条件、交易に係わった期間や歴史的な経緯など、複数の要因が先住民の毛皮交易に作用し、その結果として複数の変化のパターンが存在しており、北米における毛皮交易が先住民社会に与えた影響は一樣ではない。ウルフの仮説は主に第二のタイプと第三のタイプの社会変化を説明するものであると言える。筆者は、ウルフの一般仮説を大枠では認めるものの、イヌイト人やケベック・クリー人のような例外となる事例が北米先住民社会には存在していることを強調しておきたい。本稿では、毛皮交易が北米北方地域に住む先住民社会にもたらした社会変化は一樣ではなく、大別すれば4つのタイプに分類することができることを指摘するとともに、この試論の妥当性、変化の状況や過程についての詳しい分析は別稿に譲りたい。

7.2 毛皮交易と先住民社会の階層化

北米北方地域においては、毛皮交易と先住民社会の階層化との間に見られる因果関係は単純なものではなかった。

ベーリング海峡地域に住むチュクチ人やイヌピアク人の場合では、ヨーロッパ人との毛皮交易が先住民社会に階層化を生み出した。すでに指摘したように、交易の仲介者として巨万の富を1代で築いた先住民が出現した(Bockstoce 1995: 197-199)。

北西海岸地域においては、毛皮交易が新たに階層を生み出したと言うよりも、既存の階層制を顕在化させた。渡辺仁らの研究によって、北太平洋沿岸に沿って分布する

先住民社会では、欧米人や和人、中国人と接触する以前から階層化が見られたことが知られている (Townsend 1980; 渡辺 1990: 第2章; テスタール 1995: 68-87; Schweitzer 1998など)。それらの社会は主に海獣狩猟や漁労を生業とする人々で構成されていたが、先住民間で交易を行う、定住性が高い、階層化が見られる、といった特徴を有していた。

毛皮交易に従事する以前からそれらの社会に階層化や定住生活が見られたのは、サケやクジラが豊富に生息するという生態学的な条件が存在し、その資源を捕獲するための技術の人々が持っていたことが大きな要因であった。これらの条件下で、渡辺は家族間の生業分化によって可能になった余剰生産を基盤に置く蓄財が、テスタールは貯蔵技術の存在が、これらの社会における定住化や階層化を可能にしたと考えている (テスタール 1990; 渡辺 1990b)。ここで再度、強調しておきたいことは、それらの社会ではヨーロッパ人や中国人と交易を開始する以前から、先住民間交易や社会階層が存在していたことである。

例えば、クワクワカワク (クワキウトル) 人などの間には、貴族/平民/奴隷からなる階層が、ヨーロッパ人と毛皮交易を開始する以前から存在していた (Donald 1997)。毛皮交易によって新たに入ってくる財や物資によってポトラッチは盛大になり、トーテム・ポールは巨大化した。これらの活動によって貴族の地位はさらに強化され、階層差が顕在化したのである。

一方、毛皮交易が先住民社会において階層化をほとんど生み出さなかった事例が存在している。1910年代以降に本格的に毛皮交易に参画したカナダ・イヌイット人の多くは、定住生活を開始する1960年代までは、毛皮交易によって獲得した富や大型木製ボートをキャンプ集団全体 (大型拡大家族集団) の生業を維持、促進させるために利用し、捕獲した海獣の肉をキャンプ集団内で必要に応じて分配したために、生業の分化や経済的な特化、階層化は起こらなかった。毛皮交易はイヌイットに利益をもたらしたが、資源の分配や相互扶助の制度が発達していたために、彼らの間に階層を生み出すことはなかった。イヌイット人の事例で強調しておきたい点は、イヌイット人は一般的に毛皮交易に進んで参加し、交易を通して入手した物品や道具などを狩猟・漁労活動を効率的に行うために利用してきたことである。毛皮交易と彼らの生業活動は矛盾しあうものではなかった¹⁷⁾。また、家族狩猟テリトリー・システムを維持してきたジェームズ湾地域のクリー人は、そのシステムのもとで生業活動を維持し、毛皮交易に深く関わったにもかかわらず、彼らの間には経済的な階層化は見られなかった (Feit 1991)。

これらの事例から分かることは、毛皮交易への係わり方や先住民社会のシステムの違いによって階層化が見られたり見られなかったりしており、北米北方地域における毛皮交易は社会の階層化と直結するものではないということである。そのうえで、筆者は、北米北方先住民社会における階層化の出現と交易活動における経済特化の程度の間には因果関係があるという仮説を提起しておきたい。

8 結 び

本稿では、北米北方地域における交易活動について、毛皮交易を中心にその全体像を素描した。そして毛皮交易に係わる先住民社会の変化と階層化に関して若干の検討を加え、仮説の提起を試みた。最後に研究の成果を要約し、結びとしたい。

第一に、アラスカ地域や北米北西海岸地域では、沿岸に沿って南北間で、内陸部と沿岸部との間で、さらにベーリング海峡を挟んで新旧大陸間で、先住民による交易が行われていた。毛皮交易期以前から交易の仲介者として活躍したグループが存在しており、先住民間交易のネットワークが存在していた。そのような交易活動や交易のネットワークは、北米北方地域の他の地域にも存在していた。

第二に、この先住民間の交易のネットワークは、毛皮交易が開始されると強化、拡大された。国境の成立などを契機として国家の支配が強化され、かつ貨幣経済が浸透するまでは、市場の論理に基づく毛皮交易と物々交換による先住民間交易は並行して存続していた。

第三に、北米の北方地域においては、毛皮交易が始まると、カナダの極北地域を除く地域では、欧米人と奥地の先住民との間で交易の仲介者となる先住民が続々と出現した。しかし、毛皮獣（特にビーバー）の数が捕獲によって減少してくると、毛皮交易は資源の新たな供給地を求めて東海岸から西進していった。この変化を遂げる毛皮交易の中で地の利を得るために、先住民グループの移動、グループ間の争い、グループの再編成や政治・経済関係の変化などが引き起こされた。

第四に、毛皮交易の初期には、この交易はヨーロッパ人と先住民の両方に利益をもたらした。その結果、アラスカの南西地域や北米北西海岸地域に住む先住民の諸文化が活性化し、工芸品や儀礼が発達した。

第五に、毛皮交易の開始の副産物として、多くの地域にはしかや天然痘などの伝染病が伝わり、人口減少をもたらし、先住民社会の再編を迫るなど、大きな影響を及ぼした。

第六に、毛皮交易は先住民を資本主義経済システムに本格的に接合させ、長期的には外部経済に依存させることになったが（Wolf 1982; Wenzel 1991; 小谷 1992: 127; 下山 1995, 1996, 1997; Crowell 1997; 池谷 1999）¹⁸⁾、北米北方地域においては毛皮交易が先住民社会に及ぼした影響やそれらに対する先住民の反応は一様なものではなかった。北米北方地域の毛皮交易の進展は、ヨーロッパ市場と中国市場における毛皮の需要に起因していた。それらの需要に対し、北米北方地域の先住民は毛皮を提供する役目を担っていた。経済活動を毛皮交易に特化し、食料の大半を外部に依存した先住民のグループは、交易が衰退するとともに社会的な大変化を被った。しかし、カナダ・イヌイット人やケベック北部のクリー人のように、1980年代に至るまで毛皮交易と社会の再生産が両立した事例が存在する。彼らは毛皮交易に係わりながらも、そのみに経済活動を特化せず、食料獲得のための狩猟・漁労活動を続けてきた。その結果、変化は被りつつも社会関係の再生産を可能としたのであった。

第七に、多くの先住民社会においては階層化や階層差の顕在化は毛皮交易と関係していたが、カナダのイヌイット社会のように分配制度によって経済的な階層差があまり顕在化しなかった事例が見られた。北米北方地域の先住民社会において階層化が見られたかどうかは、所与のグループが毛皮交易など交易活動に関連して経済的に特化したかどうか因果的に関係しているという仮説を提起した。

謝 辞

本研究は、平成9年度および10年度に北米北西海岸、アラスカ、カナダと、アメリカの中部および東部において、大塚和義教授と筆者が実施した調査の成果を発展させたものである。現地調査は、国際学術研究「北太平洋における先住民社会と交易に関する民族学的研究」（代表者：大塚和義、課題番号09041042）の一部として実施された。また、この論文の一部を国立民族学博物館共同研究会「東アジアの狩猟採集民文化の研究」（代表者：佐々木史郎、1999年11月25日実施）と北海道開拓記念館主催による北の文化交流史関連講演会「狩猟と毛皮交易」（1999年11月28日開催）において口頭で報告した。その際、出席者から多数の質問や貴重なコメントを頂戴し、論文を完成させるうえで参考にさせていただいた。大塚和義、佐々木史郎、出利葉浩司の各氏、また共同研究会・講演会に参加された方々に感謝する次第である。

ベーリング海峡交易についてはアラスカ大学のピーター・シュワイツァー氏から、アラスカ南西部の交易についてはアロン・クローウェル氏とデイヴィッド・マクマハーン氏から、カナダ北西海岸地域の先住民間交易についてはグローリア・ウェブスター氏から、カナダの毛皮交易についてはマクギル大学のトビー・モーランツ氏からご教示を得た。先史交易および毛皮交易に関する文献についてはスチュアート・ヘンリ（本多和俊）とジェームズ・サヴェール、イゴリ・クルブニク、大村敬一、池谷和信、手塚薫、端信行の各氏からご教示をいただいた。また、草

稿に対しシュアートヘンリ、佐々木史郎、手塚薫、赤嶺淳の各氏からご批判、コメントを頂戴した。これらすべての方々へ感謝の微意を表すものである。

注

- 1) 16世紀から18世紀にかけて、ロシアはヨーロッパに対する最大の毛皮の供給者であった。そしてピョートル大帝による東進の目的のひとつは、ロシアによる毛皮の開発とその独占を行い、巨額の富を蓄積することであったと言われている。
- 2) ビーバーは濃い体毛で覆われている。その体毛は堅くて長い剛毛と、その中に混じっている柔らかくて短い綿毛の2種類からなる。ビーバーの綿毛とフェルト生地を混ぜ合わせることで独特の光沢を持つフェルトが製造された。そのフェルトで製造された帽子がフェルト帽である。ビーバー・フェルトを製造するためには、綿毛のみを取り出す技術が必要であった。
- 3) R. Davis の研究 (“English foreign trade 1700-1774” (in W. E. Minchinton, ed., *The growth of English overseas trade in the seventeenth and eighteenth centuries*, Mathuen & Co. Ltd., 1969)) を参照した下山は、ビーバー毛皮帽はスペイン、ポルトガルへと輸出され、フェルト帽は東インドやアフリカに輸出されたことを指摘している (下山 1990: 77)。
- 4) スミソニアン協会アラスカ事務所の考古学者クローウェル博士の話によると、イピウタク文化 (Ipiutak Culture) やオールド・ベリング海文化 (Old Bering Sea Culture) (約2000年前) の鉄は、中国や日本から入ってきている可能性があると言う。また、約1000年前に骨製よろいがシベリアからアラスカに入ってきているが、それは日本製のよろいに酷似していると言う。
- 5) モリソンによると、ステファンソンが報告したコパー・イヌイット人による石ランプの取引は他の先住民を介したロシア人とのベリング海峡取引の脈絡で理解すべきだと言う (Morrison 1991: 242)。コパー・イヌイット人はこの取引ネットワークによってロシアの鉄を間接的に入手していた。
- 6) アラスカの南部から北米北西海岸地域の北部に住むトリンギット人は、南から来るアメリカ人と交易し、富を蓄積するとともに火器を入手した。また、対火器用の鎧などを持っていた。トリンギット人は、1802年、1809年、1813年、1855年にシトカ (Sitka, ロシア名 New Archangel) を襲撃した。1802年には、600人あまりのトリンギット人がシトカの砦を壊し、20人のロシア人、130人のアリュート人を殺害し、3000枚の毛皮を奪取した (Fisher 1996: 141)。
- 7) 1867年にアラスカがアメリカ領になった時にシトカの交易所の倉庫にあった交易品のリストについては、Oswalt (1980: 152-154) を参照されたい。アラスカ内陸部には18世紀にロシア・ビーズが入ってきている。19世紀半ばには社会的に成功したグイッチン人男性がビーズで装飾された幅広ベルトを肩や首にかけていたと言う (Duncan 1997: 21; 井上 1999: 35)。
- 8) クローウェル (Crowell 1997) は、19世紀中葉以前の遺跡からビーズは多数出土しているが、鉄、銅、陶器、ガラス瓶はきわめて少ないことを指摘している。ピチコフは、イルクーツク近くのバイカル湖のタルチンスク・ガラス工場 (Tal'tsinsk Glass Factory) でビーズが生産されていたことを報告している (Bychkov 1997)。
南アラスカに分布しているビーズは、中国ないしは広東ビーズ、紅色玉ずいビーズ (Cornaline d'Allepo)、ロシア・ビーズである。中国・広東ビーズは北西海岸先住民の取引によって持ち込まれたらしい。紅色玉ずいビーズは、15世紀から19世紀半ばまでにベニスで生産されたものである。さらにいわゆる「ロシア・ビーズ」は1820年以降にチェコのボヘミアで生産され、ハドソン湾会社との取引によって入ってきたらしい (Crowell 1997: 170-171)。ビーズについては Francis (1994) や Woodward (1989: 4-15) を読みたい。
- 9) ビーズで彩られた装飾品やネックレスは、先住民にとっては富や地位の象徴であった。例えば、アラスカ内陸部のアサバスカン語族系先住民の社会においては、ビーズを含めた交易品を身につけることは社会的な地位の高さや経済的な裕福さを示す社会的な装置であった (Simeone 1995: 56; Duncan 1997; 井上 1999: 39-40)。
- 9) バラノフ (Alexander Baranov) は1791年にコディアク島に基地を設け、1799年にはシトカに砦と交易所を開設した。さらに、北米北西海岸におけるロシア人の定住地の設立に努め、

- 1810-1811年にはサンフランシスコの近くにロス定住地を開設した。彼はバルト海からの世界周航船に頼るとともに、ハワイとの通商を計画し、アメリカやイギリスの資本と提携することによって、ロシア植民地への必要物資の補給問題を解決しようとした（木崎 1991: 151）。1839年に露米商会はハドソン湾会社と協定を結び、対立関係が緩和された。これによって同社はアラスカにある露米商会の交易所に物資を供給し始めた。この契約は、一方ではアメリカ人の交易者の収入源を奪い取る結果をまねいた。
- 10) ポトラッチについては立川（1999a, 1999b）、益子（1982, 1992）を参照されたい。また、トーテム・ポールについては大貫（1977）を参照されたい。
 - 11) 北西海岸からは大量の中国銭や少ないながらも日本銭（「寛永通宝」）が見つかる。これらの古銭の大半は、中国の清朝初期から中期（1644-1796年）にかけて鑄造された銭（「順治通宝」、「康熙通宝」、「雍正通宝」、「乾隆通宝」など）で、北米先住民によって裝飾用に20世紀の初めまで利用された。北西海岸へアジアの貨幣が伝播してきた経路として、3つ考えられる。第一は、18世紀後半の広東交易、後には中国人移民による流入である。第二は、日本やアジアの難破船がアリューシャン列島からオレゴン州にかけての地域に漂着したことによる流入である。そして第三は、スペイン人によるフィリピン経由での流入である。1564年以降、フィリピンを占領したスペイン人は、明朝およびそれ以前の中国銭を中国からメキシコのアカプルコへ持ち込み、それが先住民の手を介して広がっていった（Keddie 1990: 4-8, 18）。
 - 12) 1860年代以降のカワカワカワク社会におけるポトラッチの流行について、ワレンスは興味深い指摘を行っている。彼によると、ポトラッチは「死」と「再生」の儀式であったため、1860年代から蔓延した天然痘とそれによる人口の減少が、ポトラッチの開催回数を増加させたと言う（Walens 1981）。
 - 13) オジブワというグループは、毛皮交易が進展する中で複数のグループ出身の先住民が集まって形成された新たな民族である（Bishop 1974）。
 - 14) この家族狩猟テリトリー・システムにはビーバー資源を保全する機能がある点を強調しておきたい（Feit 1991）。この制度の出現については諸説がある。リーコックは、毛皮交易への参加すなわち資本主義への接触と包含により、カナダの東部亜極北地域に住む先住民が特定の狩猟場やその動物資源に対して所有意識を持ち始めるようになり、特定の人物（家族）が特定のテリトリーを専用するシステムが成立したと考えた（Leacock 1952）。一方、フェイトは、このシステムはクリュー人が毛皮交易を本格的に開始する以前から存在し、生態系保全機能のある独自の社会経済制度であると主張している（Feit 1991）。煎本は、このシステムが毛皮交易に参加したチベワヤン人の中には出現しなかったことに注目し、モンタニェ人やキャリー人の地域と比較し、このシステムの成立には大型狩猟獣の減少に代表される生態環境の変化（生活基盤であるサケやカリブーが減少し、ビーバーの罾猟に依存せざるを得なくなったこと）とビーバーの生息密度（ビーバーの生息密度が高い地域であること）という2つの要因が重要であると指摘している（煎本 1994: 10-11）。家族狩猟テリトリーをめぐる論争については、Bishop and Morantz, eds (1986) を参照されたい。
 - 15) ラブラドル・イヌイットの人々の間では、18世紀半ばにクジラのヒゲをほかのイヌイット人から入手し、ヨーロッパ人と交易するイヌイット人が存在したと推定されている（Taylor 1984: 511）。
 - 16) 北米における毛皮交易は、私的な毛皮商人や会社を相手とする自由競争か、露米商会による交易のような支配交易（徴税・強制狩猟）であった。アジアの極東に居住するウデへ人の場合には、彼らの毛皮獣捕獲活動は、東アジアの王朝支配の交易（清朝との朝貢交易）（第1期）、ロシア人による初期資本主義的な交易（第2期）、ソ連時代の社会主義的計画経済下での生産活動（第3期）、ソ連崩壊後の初期資本主義的な市場経済（第4期）の4時代を体験している。佐々木（1997）は、先住民の立場からすると国がウデへの交易を保護した時期（第1期と第3期）には生活が安定していたが、資本主義経済下（第2期と第4期）では生活が混乱していることを例証している。ウデへ人の場合には、国家が生産量や取引量をコントロールしている限りは、毛皮市場の変動に係わりなく、毛皮獣狩猟や先住民の生活は安定しており、経済を毛皮獣捕獲に特化していても社会やアイデンティティの再生産が可能であった。
 - 17) 現在のイヌイット人の村や地域を単位として個人の年収や学歴を基準とすると、経済階層が存在していると言える。しかし食物分配や相互扶助が現在でも根強く実践されている人口規模が500人に満たない村では、確固たる階層が存在しているとは言い難い。個々の拡大家

族内やキンドレッド内では、食物分配による経済的な平準化が見られる。イヌイット社会においてはこの平準化が作用するため、個人が階層を上昇することはきわめて困難である。同社会において確固とした階層化は、個人ではなく、拡大家族を単位として出現するという仮説を提起しておきたい。

18) クローウェルは毛皮交易が北米の先住民社会において引き起こした社会・経済変化を次のように要約している (Crowell 1997: 11)。

- 1 毛皮交易に係わった結果、北米先住民の移動性、柔軟性と社会的互酬性に基づく生業戦略は変化し、罾猟師、仲介的交易者、定住化した「ホーム・ガード」などといった経済分化が見られた。
- 2 毛皮獣の減少に伴い、集団間の競争が激化し、領土性が明確に意識され始めた。
- 3 毛皮交易の初期には、ヨーロッパ人と奥地の先住民との仲介者となった先住民のグループは、富力と政治力を高めた。例えば、北米北西海岸においては、毛皮交易は個人やリニージ間の地位の差異を顕在化させる機能を果たした。
- 4 北米の毛皮交易のために、一般的に先住民はヨーロッパの技術、信用貸し、移入された食料への依存度を高めていった。しかし、この毛皮交易システムは北米先住民の親族を中心とした生産・生活様式を崩壊させはしなかった。より南の先住民は農業移民によって土地を奪われたが、極北や亜極北地域ではそのようなことはなかった。

ワルドマンは17世紀から19世紀にかけて毛皮交易が北米先住民に及ぼした諸影響を次のように要約している (Waldman 1985: 74)。

- 1 ハンターは毛皮の供給者や交易パートナーとしてヨーロッパ人の文化にさらされた。
- 2 ヨーロッパの病気が新大陸において蔓延した。
- 3 乱獲による毛皮獣の減少によって食物連鎖に変化が起こり、生態システムが変化した。
- 4 ヨーロッパ人の毛皮交易者、罾猟師の到来に続いて、交易所や軍隊の駐屯地ができ、さらに開拓者が先住民の生活領域に流入してきた。

文 献

阿部隆夫

- 1999 「毛皮取引記録が語るカナダの先住民とヨーロッパ人との関係——1830年代のフォートチパワヤンとカンバーランド・ハウスにおける毛皮交易を通じて」『カナダ研究年報』19, 19-38。

秋道智彌

- 1997 「共有資源をめぐる相克と打開」福井勝義編『環境の人類学』(岩波講座 文化人類学 第2巻) pp. 165-187, 東京: 岩波書店。

Arndt, K. L.

- 1990 Russian exploration and trade in Alaska's interior. In B. S. Smith and R. J. Barnett (eds) *Russian America: The forgotten frontier*, pp. 95-107. Tacoma: Washington State Historical Society.

Barr, W.

- 1994 The 18th century trade between the ships of the Hudson's Bay Company and the Hudson Strait Inuit. *Arctic* 47(3), 236-246.

Baer, K-E W. and F. Petrovich (R. A. Pierce, ed.)

- 1980 *Russian America: Statistical and ethnographic information*. Kingston: Limestone Press.

Bailey, A. G.

- 1969 *The conflict of European and eastern Algonkian cultures 1504-1700* (second edition). Toronto: University of Toronto Press.

Bishop, C. A.

- 1974 *The northern Ojibwa and the fur trade*. Toronto: Holt, Rinehart and Winston of Canada, Limited.

Bishop, C. A. and T. Morantz (eds)

- 1986 *Who owns the beaver?: Northern Algonquian land tenure reconsidered* (special issue).

- Anthropologica (N. S.) 18 (1/2).
- Bockstoce, J. R.
1995 *Whales, ice, and men: The history of whaling in the western Arctic*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Bogoras, V. G.
1904-09 *The Chukchee* (Memoirs of the American Museum of Natural History 11), reprinted in 1975. New York: AMS Press.
- Brown, J. S. H.
1980 *Strangers in blood: Fur trade company families in Indian country*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- Burch, Jr., E. S.
1970 The Eskimo trading partnership in north Alaska. *Anthropological papers of the University of Alaska* 15(1), 49-80.
1988 War and trade. In W. W. Fitzhugh and A. Crowell (eds) *Crossroads of continents: Cultures of Siberia and Alaska*, pp. 227-240. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Bychkov, O. V.
1997 The origin of colonial glass production in Irkutsk: Research perspectives. In P. R. Mills and A. Martines (eds) *The archaeology of Russian colonialism in the North and tropical Pacific* (Kroeber Anthropological Society papers 81) pp. 40-47. Berkeley: University of California Press.
- Cochrane, J. D.
1824 *Narrative of a pedestrian journey through Russia and Siberian Tartary, from the frontiers of China to the frozen sea and Kamtchatka: Performed during the years 1820, 1821, 1822 and 1823*. Philadelphia: H. C. Carey, and I. Lea, and A. Small.
- Codere, H.
1961 Kwakiutl. In E. H. Spicer (ed.) *Perspectives in American Indian culture change*, pp. 431-516. Chicago: University of Chicago Press.
- Collins, H. B.
1937 Archaeology of St. Lawrence Island, Alaska. *Smithsonian miscellaneous collections* 96(1).
- Crowell, A. L.
1997 *Archaeology and the capitalist world system: A study from Russian America*. New York and London: Plenum Press.
- Damas, D.
1996 The Arctic from Norse contact to modern times. In B.G. Trigger and W.E. Washburn (eds) *The Cambridge history of the native peoples of the Americas Vol.1, North America Part 2*, pp. 329-399. Cambridge: Cambridge University Press.
- Damas, D. (ed.)
1984 *Arctic* (Handbook of North American Indians Vol. 5). Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Donald, L.
1997 *Aboriginal slavery on the Northwest coast of North America*. Berkeley: University of California Press.
- Drucker, P.
1943 *Archaeological survey on the northern Northwest coast*. (Bulletin 133, Archaeological paper No. 20), Washington, D.C.: Bureau of American Ethnology, Smithsonian Institute.
1948 The antiquity of the Northwest coast totem pole. *Journal of the Washington Academy of Sciences* 38, 389-397.
- Duff, W.
1964a *The Indian history of British Columbia Vol. 1: The impact of the white man* (Anthropology in British Columbia memoir 5). Victoria: Provincial Museum.

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

- 1964b Contributions of Marius Barbeau to West coast ethnography. *Anthropologica* 6, 63-96.
- Duncan, K. C. with E. Carney
1997 *A special gift: The Kutchin beadwork tradition*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- Eccles, W. J.
1988 The fur trade in the colonial Northwest. In W. E. Washburn (ed.) *History of Indian-White relations* (Handbook of North American Indians Vol. 4), pp. 324-334. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Feit, H.
1991 Gifts of the land: Hunting territories, guaranteed incomes and the construction of social relations in James Bay Cree society. In N. Peterson and T. Matsuyama (eds) *Commoditisation and changing foragers* (Senri ethnological studies 30), pp. 223-268. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Fienup-Riordan, A.
1983 *The Nelson Island Eskimo*. Anchorage: Alaska Pacific University Press.
- Fisher, R.
1977 *Contact and conflict*. Vancouver: University of British Columbia Press.
1996 The Northwest from the beginning of trade with Europeans to the 1880s. In B.G. Trigger and W. E. Washburn (eds) *The Cambridge history of the native peoples of the Americas Vol. 1, North America Part 2*, pp. 117-182. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fitzhugh, W. W. and A. Crowell (eds)
1988 *Crossroads of continents: Cultures of Siberia and Alaska*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- フォーンス, ジェームス
1998 『シベリア先住民の歴史』 森本和男訳, 東京: 彩流社。
- Francis, D. and T. Morantz
1983 *Partners in furs: A history of the fur trade in eastern James Bay 1600-1870*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Francis, P. Jr.
1994 Beads at the crossroads of continents. In W. W. Fitzhugh and V. Chaussonnet (eds) *Anthropology of the North Pacific rim*, pp. 281-305, Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Ganley, M. L.
1995 The Malimiut of northwest Alaska: A study in ethnonymy. *Études/Inuit/studies* 19(1), 103-118.
- Gibson, J. A.
1988 The maritime trade of the North Pacific coast. In W. E. Washburn (ed.) *History of Indian-White relations* (Handbook of North American Indians Vol. 4), pp. 375-390. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
1992 *Otter skins, Boston ships, and China goods: The maritime fur trade of the Northwest coast 1785-1841*. Montreal: McGill and Queen's University Press
- Golder, F. A.
1960 *Russian expansion in the Pacific 1641-1850*. Gloucester: Peter Smith.
1968 *Bering's voyages Vol. II: Steller's journal of the sea voyage from Kamchatka to America and return on the second expedition 1741-1742*. New York: Octagon Books.
- Gramly, R.
1978 Lithic sources areas in northern Labrador. *Arctic anthropology* 15(2), 36-47.
- Graburn, N. H. H.
1969 *Eskimos without igloos*. Boston: Little, Boston and Company.
- 端 信行
1987 「交易」 石川栄吉他編『文化人類学事典』 pp. 263-264, 東京: 弘文堂。

- Heizer, R. F.
 1940 The introduction of monetary shells to the Indians of the Northwest coast. *Pacific Northwest quarterly* 31(4), 171-180.
- Helm, J. (ed.)
 1981 *Subarctic* (Handbook of North American Indians Vol. 6). Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Hickey, C.
 1979 The historic Beringian trade network: Its nature and origins. In A. P. McCartney (ed.) *Thule Eskimo culture: An anthropological retrospective* (National Museum of Man, Mercury series, Archaeological survey of Canada 88), pp. 411-435. Ottawa: National Museums of Canada.
- 細川道久
 1999a 「ヨーロッパの拡大とカナダ」木村和男編『カナダ史』pp. 25-56, 東京: 山川出版。
 1999b 「ヌーヴェル・フランスの発展」木村和男編『カナダ史』pp. 57-91, 東京: 山川出版。
 1999c 「英仏両帝国の抗争とカナダ」木村和男編『カナダ史』pp. 92-111, 東京: 山川出版。
- Howay, F. W. (R. A. Pierce, ed.)
 1973 *A list of trading vessels in the maritime fur trade 1785-1825*. Kingston: Limestone Press.
- Howay, F. W. (ed.)
 1968 *Voyages of the "Columbia" to the Northwest coast 1787-1790 and 1790-1793*. New York: Da Capo Press.
- 池谷和信
 1999 「狩猟民と毛皮交易」『民族学研究』64(2), 199-222。
- Innis, H. A.
 1970 *The fur trade in Canada*. Toronto: University of Toronto Press.
 1978 *The cod fisheries: The history of an international economy*. Toronto: University of Toronto Press.
- 井上俊昭
 1999 「『文化伝統』としてのビーズ・ワーク: アラスカ・グイッチン社会におけるビーズ・ワークの役割とそこに見る社会的重要性に関する考察」『北海道立北方民族博物館紀要』8, 31-55。
- 煎本 孝
 1994 「カナダ・インディアンの文化変化」『カナダ研究年報』14, 1-17。
- Jacobs, J. and D. Stenton
 1985 Environment, resources and prehistoric settlement in upper Frobisher Bay, Baffin Island. *Arctic anthropology* 22(2), 59-76.
- Jopling, C. F.
 1989 The coppers of the Northwest coast Indians: Their origin, development, and possible antecedents. *Transactions of the American Philosophical Society* 79(1).
- Jordan, R. H.
 1978 Archaeological investigations of the Hamilton Inlet Labrador Eskimo. *Arctic anthropology* 15(2), 175-185.
- Judd, C. M. and A. J. Ray, (eds)
 1978 *Old trails and new directions: Papers of the third North American fur trade conference*. Toronto: University of Toronto Press.
- Kaplan, S. A.
 1985 European goods and socio-economic change in early Labrador Inuit society. In W. W. Fitzhugh (ed.), *Cultures in contact*, pp. 45-69. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Karamanski, T. J.
 1982 *Fur trade and exploration: Opening the far Northwest 1821-1852*. Norman: University of Oklahoma Press.

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

河内良弘

1971 「明代東北アジアの貂皮貿易」『東洋史研究』30(1), 62-120.

Keddie, G. R.

1990 The question of Asiatic objects on the North Pacific coast of America: Historic or prehistoric? *Contributions to human history series 3*. Victoria: Royal BC Museum.

Kehoe, A. B.

1992 *North American Indians: A comprehensive account* (second edition). Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

木村和男

1999 「イギリス植民地としての発展」木村和男編『カナダ史』pp. 112-162, 東京: 山川出版。

岸上伸啓

1990 「接触=伝統期におけるカナダ・イヌイットのキャンプ集団の構成原理について」『社会人類学年報』16, 165-177。

1992 「北米先住民に関するエスノヒストリー研究の最近の展開について (その1)」『北海道教育大学紀要 第1部B』43(1), 63-77。

1993 「北米先住民に関するエスノヒストリー研究の最近の展開について (その2)」『北海道教育大学紀要 第1部B』43(2), 15-26。

1996a 「カナダ・イヌイットの社会・経済変化」『国立民族学博物館研究報告』21(4), 715-775。

1996b 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」スチュアートヘンリ編『採集狩猟民の現在』pp. 13-52, 東京: 言叢社。

1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』東京: 弘文堂。

1999 「先住民資源論序説——資源をめぐる人類学的研究の可能性について」『人文論究』(北海道教育大学函館校) 68, 63-80。

木崎良平

1991 『漂流民とロシア』(中公新書) 東京: 中央公論社。

郡山良光

1980 『幕末日露関係史研究』東京: 国書刊行会。

小谷凱宣

1992 「北方民族と毛皮交易」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学』pp. 107-131, 京都: アカデミア出版会。

黒田信一郎

1992 「チュクチの抵抗」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学』pp. 161-184, 京都: アカデミア出版会。

Langdon, S. J.

1971 The integration of cash and subsistence in southwest Alaskan Yup'ik Eskimo communities. In N. Peterson and T. Matsuyama (eds) *Commoditisation and changing foragers* (Senri ethnological studies 30), pp. 269-291. Osaka: National Museum of Ethnology.

Lattourett, K. S.

1927 Voyages of American ships to China 1784-1844. *Transactions of the Connecticut Academy of Arts and Sciences* 28, 237-271. New Heaven.

ラフリン, ウィリアム

1986 『アリュート民族誌』スチュアートヘンリ訳, 東京: 六興出版。

Leacock, E.

1952 *The Montagnais 'hunting territory' and the fur trade* (American Anthropological Association memoir 78).

Lee, M.

1996 Context and contact: The history and activities of the Alaska Commercial Company 1867-1900. In N.H.H. Graburn, et. al. (eds) *Catalogue raisonne of the Alaska Commercial Company collection, Phoebe Apperson Hearst Museum of Anthropology*, pp. 19-38. Berkeley: University of California Press.

- Lohse, E. S.
 1988 Trade goods. In W. E. Washburn (ed.) *History of Indian-White relations* (Handbook of North American Indians Vol. 4), pp. 396-403. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Mackenzie, A.
 1973 *Voyages from Montreal through the continent of North America to the frozen and Pacific oceans in 1789 and 1793: With an account of the rise and state of the fur trade*. New York: AMS Press.
- 益子待也
 1982 「ポトラッチの神話学——トリンギット族における死と再生の論理」『民族学研究』47(3), 221-244。
 1992 「トリンギットの社会と儀礼——南東アラスカの『ポトラッチ』における言葉の交換」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学』pp. 79-105, 京都: アカデミア出版会。
- McCartney, A. P.
 1988 Late prehistoric metal use in the new world Arctic. In R. D. Shaw, R. K. Harritt, and D. E. Dummonf (eds) *The late prehistoric development of Alaska's native people*. (Alaska Anthropological Association monograph series 4), 57-79.
 1992 Canadian Arctic trade metal: Reflections of prehistoric to historic social networks. In R. M. Ehrenreich (ed.) *Metals in society: Theory beyond analysis* (MASCA research papers in science and archaeology Vol. 8), pp. 27-43.
- McCartney, A. and D. Mack
 1977 Iron utilization by Thule Eskimos of central Canada. *American antiquity* 38(3), 328-339.
- McGhee, R.
 1984 Contact between native North Americans and the medieval Norse: A review of the evidence. *American antiquity* 49(1), 4-26.
- Michael, H. N. (ed.)
 1967 *Lieutenant Zagoskin's travels in Russian America 1842-1844: The first ethnographic and geographic investigations in the Yukon and Kuskokwim valleys of Alaska*. (Anthropology of the North: Translations from Russian sources 7). Toronto: University of Toronto Press.
- Miller, P. G.
 1994 *Early contact glass trade beads in Alaska*. Altamonte Springs: The Bead Society of Central Florida.
- Morantz, T.
 1983 *An ethnohistoric study of eastern James Bay Cree social organization 1700-1850* (National Museum of Man, Mercury series, Canadian ethnology service paper 88). Ottawa: National Museums of Canada.
- Morrison, D.
 1986 Thule and historic copper use in the Copper Inuit area. *American antiquity* 52(2), 3-12.
 1991 The Copper Inuit soapstone trade. *Arctic* 44(3), 239-246.
- Morse, E. W.
 1984 *Fur trade canoe routes of Canada*. Toronto: University of Toronto Press.
- Neatby, L. H.
 1985 Exploration and history of the Canadian Arctic. In D. Damas (ed.) *Arctic* (Handbook of North American Indians Vol. 5), pp. 377-390. Washington, DC: Smithsonian Institution Press.
- 岡田淳子
 1999 『北の民族誌——北太平洋文化の系譜』京都: アカデミア出版会。
- 岡田宏明
 1997 「ロシア期におけるアリュートの文化変化」『北海道立北方民族博物館研究紀要』6, 1-8。

大貫良夫

- 1977 「トータル・ポール——その社会的ならびに歴史的意味について」『民族学研究』41(4), 317-329。

Oswalt, W. H.

- 1980 *Kolmakovskiy redoubt: The ethnoarchaeology of a Russian fort in Alaska* (Monumenta archaeologica 8). Los Angeles: Institute of Archaeology, University of California.
1989 *Bashful no longer: An Alaskan Eskimo ethnohistory 1778-1988*. Norman and London: University of Oklahoma Press.

Panneboek, F.

- 1986 *The fur trade and western Canadian society 1670-1870*. (Canadian Historical Association historical booklet 43) Ottawa: The Canadian Historical Association.

Pethick, D.

- 1976 *First approaches to the Northwest coast*. Vancouver: J. J. Douglas.

Pierce, R. A.

- 1988 Russian and Soviet Eskimo and Indian policies. In W. E. Washburn (ed.) *History of Indian-White relations* (Handbook of North American Indians Vol. 4), pp. 119-127. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
1990 Russian America and China. In B. S. Smith and R. J. Barnett (eds) *Russian America: The forgotten frontier*, pp. 73-79. Tacoma: Washington State Historical Society.

Pierce, R. A. (ed.)

- 1980 *Russian America: Statistical and ethnographic information*. (Materials for the study of Alaskan history 15, by Rear Admiral Ferdinand Petrovich Wrangell with additional material by Karl-Ernst Baer). Kingston, Ont.: The Limestone Press.

ポランニー, K.

- 1980 『人間の経済 (I, II)』玉野井芳郎・栗本慎一郎・中野忠訳, 東京: 岩波書店。

Rasmussen, K.

- 1931 The Netsilik Eskimos: Social life and spiritual culture. *Report of the fifth Thule expedition 1921-1924* 8(1, 2). Copenhagen: Gyldendal

Ray, A. J.

- 1974 *Indians in the fur trade: Their role as trappers, hunters, and middlemen in the lands southwest of Hudson Bay 1660-1870*. Toronto: University of Toronto Press.
1974 Some conservation schemes of the Hudson's Bay Company 1821-50: An examination of the problems of resource management in the fur trade. *Journal of historical geography* 1, 49-68.
1988 The Hudson's Bay Company and native people. In, W. E. Washburn (ed.) *History of Indian-White relations* (Handbook of North American Indians vol. 4), pp. 335-350. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
1990 *The Canadian fur trade in the industrial age*. Toronto: University of Toronto Press.
1996 The northern interior, 1600 to modern times. In B. G. Trigger and W. E. Washburn (eds) *The Cambridge history of the native peoples of the Americas Vol. 1, North America Part 2*, pp. 259-327. Cambridge: Cambridge University Press.

Ray, A. J. and C. B. Freeman

- 1978 *Give us good measure: An economic analysis of relations between the Indians and the Hudson's Bay Company before 1763*. Toronto: University of Toronto Press.

Ray, D.

- 1975 *The Eskimos of Bering Strait: 1650-1898*. Seattle: University of Washington Press.
1983 *Ethnohistory in the Arctic: The Bering Strait Eskimo*. Kingston: Limestone Press.

Rich, Edwin E.

- 1955 Russia and the colonial fur trade. *Economic history review* 7(3), 307-328.
1967 *The fur trade and the Northwest to 1857*. Toronto: McClland and Stewart.

Sandoz, M.

- 1964 *The Beaver men: Spealheads of empire*. Lincoln: University of Nebraska Press.

- サーリンズ, M.
 1984 『石器時代の経済学』山内昶訳, 東京: 法政大学出版局
- 佐々木史郎
 1996 『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』(NHK ブックス) 東京: 日本放送出版協会。
 1997 「広域経済システムとウデへの狩猟」『社会人類学年報』23, 1-28。
- Savelle, J.
 1989 A Thule Eskimo stone vessel complex. *Canadian journal of archaeology* 13, 21-49.
- Schweitzer, P. P.
 1998 Hierarchy and equality among hunter-gatherers of the North Pacific rim: Toward a structural history of social organization. Paper read at 8th International Conference on Hunting and Gathering Societies, Aomori, Japan, October, 22.
- Schweitzer, P. P. and E. Golovko (with a contribution by L. D. Kaplan)
 1995 Contacts across Bering Strait 1898-1948. Report prepared for the U.S. National Park Service, Alaska Regional Office.
- Sheehan, G.
 1995 Whaling surplus, trade, war, and the integration of prehistoric northern and north-western Alaskan economies, A. D. 1200-1826. In A. P. McCartney (ed.) *Hunting the largest animals: Native whaling in the western Arctic and Subarctic*. (Studies in whaling 3, Occasional publication 36) Edmonton: The Canadian Circumpolar Institute, University of Alberta.
- Sheppe, W. (ed.)
 1977 *First man west: Alexander Mackenzie's journal of his voyage to the Pacific coast of Canada in 1793*. Westport, Conn: Greenwood Press.
- 下山 晃
 1990 「植民地アメリカの毛皮交易」『龍谷大学社会科学研究年報』20, 58-80。
 1995 「毛皮交易史の研究 (3)」『社会科学』54, 217-244。
 1996 「毛皮交易史の研究 (4)」『社会科学』57, 229-257。
 1997 「毛皮交易史の研究 (5)」『社会科学』58, 85-120。
- 新保 満
 1993 『カナダ先住民デネーの世界』東京: 明石書店。
- Simeone, W. E.
 1995 *Rifles, blankets and beads: Identity, history, and the northern Athapaskan potlatch*. Norman: University of Oklahoma Press.
- Smith, B. S. and R. J. Barnett (eds)
 1990 *Russian America: The forgotten frontier*. Tacoma: Washington State Historical Society.
- Spencer, R. F.
 1976 *The north Alaskan Eskimo: A study in ecology and society*. New York: Dover Publications, Inc.
- Spicer, E. H.
 1961 Types of contact and processes of change. In E. H. Spicer (ed.) *Perspectives in American Indian culture change*, pp. 517-543. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Stefansson, V.
 1914 Prehistoric and present commerce among the Arctic coast Eskimo (Geological survey of Canada), *Museum bulletin* 6, 1-29.
- シュアートヘンリ
 1987 「エスキモー・インディアンの交渉小史」北方言語・文化研究会編『民族接触——北の視点から』pp. 100-126, 東京: 六興出版。
- Stott, M. A.
 1966 The southern Kwakiutl copper (A study based on the George Hunt manuscript). BA essay, Dept. of Anthropology, University of British Columbia.

岸上 北米北方地域における先住民による諸資源の交易について

Suttles, W. (ed.)

1990 *Northwest coast* (Handbook of North American Indians Vol. 7), Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

Swagerty, W. R.

1998 Indian trade in the trans-Mississippi west to 1870. In W. E. Washburn (ed.) *History of Indian-White relations* (Handbook of North American Indians Vol. 4), pp. 351-374. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

竹中 豊

1984 「ヌーベルフランス時代」大原祐子・馬場伸也編『概説 カナダ史』pp. 15-48, 東京：有斐閣。

立川陽仁

1999a 「ポトラッチ研究史と将来の展望」『社会人類学年報』25, 167-185。

1999b 「クワクワカワクワ貴族層の衰退」『民族学研究』64(1), 1-22。

Tanner, A.

1986 The new hunting territory debate. *Anthropologica* (N.S.) 18(1/2), 19-36.

Taylor, J. G.

1984 Historical ethnography of the Labrador coast. In D. Damas (ed.) *Arctic* (Handbook of North American Indians Vol. 5), pp. 508-521. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

寺田周史

1977 『毛皮——その種類と背景』東京：舟蕃舎。

テスタール, アラン

1990 「狩猟——採集民における食糧貯蔵の意義」親澤憲訳『現代思想』18(12), 110-127。

1995 「新不平等起源論」山内昶訳, 東京：法政大学出版局。

手塚 薫

1999 「極北圏における大型住居の出現と文化接触の関係」『北海道開拓記念館研究紀要』27, 77-84。

Tikhmenev, P. A. (D. Krenov, tr., R. Pierce, ed.)

1976 *A history of the Russian American Company*. Kingston: Limestone Press.

Town, F.

1999 *The North West Company*. Toronto: Umbrella Press.

Townsend, J. B.

1975 Alaskan natives and the Russian-American company: Variations in relationships. In J. Freedman and J. H. Barkow (eds) *Proceedings of the second congress, Canadian Ethnology Society Vol. 2* (National Museum of Man, Mercury series, Canadian service paper 28), pp. 555-570. Ottawa: National Museums of Canada.

1980 Ranked societies of the Alaskan Pacific rim. In Y. Kotani and W. B. Workman (eds) *Alaska native culture and history* (Senri ethnological studies 4), pp. 123-156. Osaka: National Museum Ethnology.

Trigger, B. G.

1976 *The children of aataentsic: A history of the Huron people to 1660*. Montreal: McGill-Queen's University Press.

1985 *Natives and newcomers*. Montreal: McGill-Queen's University Press.

1986 The historians' Indian: Native Americans in Canadian historical writing from Charlevoix to the present. *Canadian historical review* LXVII (3), 315-342.

Trigger, B. G. (ed.)

1978 *Northeast* (Handbook of North American Indians Vol. 15), Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

Usher, P.

1971 *Fur trade posts of the Northwest Territories 1870-1970* (NSRG 71-4). Ottawa: Department of Indian Affairs and Northern Development.

- Vanstone, J. W.
 1979 Inglek contact ecology: An ethnohistory of the lower-middle Yukon 1790-1935. *Fieldiana anthropology* 71.
 1984 Exploration and contact history of western Alaska. In D. Damas (ed.) *Arctic* (Handbook of North American Indians Vol. 5), pp. 149-160. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Vaughan, T. and Bill Holm
 1982 *Soft gold: The fur trade and cultural exchange on the Northwest coast of America*. Oregon Historical Society.
- Veltre, D. W.
 1990 Perspectives on Aleut culture change during the Russian period. In B. S. Smith and R. J. Barnett (eds) *Russian America: The forgotten frontier*, pp. 175-183. Tacoma: Washington State Historical Society.
- 和田一雄
 1999 「猟業史」和田一雄・伊藤徹魯『鱈脚類——アシカ・アザラシの自然史』東京：東京大学出版会。
- Waldman, C.
 1985 *Atlas of the North American Indian*. New York: Facts on File Publications.
- Walens, S.
 1981 *Feasting with cannibals: An essay on Kwakiutl cosmology*. Princeton: Princeton University Press.
- 渡辺 仁
 1990a 『縄文式階層化社会』東京：六興出版。
 1990b 「生業分化と社会階層化——北太平洋沿岸採集民における事例」梅正行訳『現代思想』18(12), 169-176。
- Wenzel, G.
 1991 *Animal rights, human rights: Ecology, economy and ideology in the Canadian Arctic*. Toronto: University of Toronto Press.
 1996 Inuit sealing and subsistence managing after the E.U. seal skin ban. *Geographische zeitschrift* 84(3-4), 130-142.
- White, R.
 1991 *The middle ground: Indians, empires, and republics in the Great Lakes region 1650-1815*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wike, J. W.
 1951 The effect of the maritime fur trade on Northwest coast Indian society. Ph.D. dissertation, Columbia University.
- Wolf, E. R.
 1982 *Europe and the people without history*. Berkeley: University of California Press.
- Woodward, A.
 1989(1965) *Indian trade goods*. Portland: Binford and Mort Publishing.
- 山中文夫
 1995 『シベリア500年史』東京：近代文芸社。
- Znamenski, A. A.
 1999 Vague sense of belonging to the Russian empire: The reindeer Chukchi's status in nineteenth century northeastern Siberia. *Arctic anthropology* 36(1-2), 19-36.

北米毛皮交易年表

		アリューシャン/アラスカ地域	北米北西海岸地域	カナダ中部/東部地域	極北地域	世界情勢
1500年				16世紀 イギリス、フランス、スペイン、ポルトガル、オランダの5カ国がアメリカの北東部の支配をもちろむ。 1534年 ジャック・カルチエがセント・ローレンス河沿いで先住民と毛皮交易を開始。 1580年頃 ラブラドル半島の沖にはバスク人の捕鯨船が、ニューファンドランドの沖にはスペイン人、ポルトガル人、フランス人、イギリス人のタラ漁船が出現。	16世紀以降 北西航路を求めて多数の探検家がある。 16-18世紀半ば ラブラドル、グリーンランド、東バフィン湾などでバスク人やオランダ人が捕鯨を行う。	16世紀頃 ポルトガル人がラブラドル、ニューファンドランド、ニューイングランドの沖にタラを求めて出漁。 1550-1850年頃 ヨーロッパでビーバーのフェルト帽が大流行。 16世紀末まで スペイン人とポルトガル人が大西洋を支配。
1600年				1603年 サムエル・ド・ジャンブレオンがニュー・フランスへ到着。 1616-1649年 ヨーロッパ人はオタワ人やニピシグ人々と連携しながら、五大湖、ハドソン湾、セント・ローレンス河の間で交易の帝国を創りあげた。 1630年代半ば 毛皮交易の仲介者がアルゴンキン人やモンタニエ人からヒューロン人へと代わる。 1634年 北米東部ではしかが流行。 1636-1637年 北米東部でインフルエンザと猩紅熱が流行。 1639年 北米東部で天然痘が流行。 1640年以降 オタワ人が仲介役となり、クリー人、オジブワ人、アシニボイン人らがスベリオル湖とヒューロン湖との間にある Sault Ste. Marie に毎年集まり毛皮を交易。 1649年 イロクオイ5民族同盟がヒューロンを攻撃。 17世紀半ばまでに アメリカ東部のインディアンは毛皮交易に深く係わりプロレタリアート化する。北米の支配はイギリスとフランスの争いになる。 17世紀半ば イロクオイ同盟が軍事・経済的に拡大。 1660年代まで 毛皮交易はセント・ローレンス河とハドソン河を利用して行われた。 1664年 イギリスがオランダからイロクオイとの交易関係を受け継ぐ。 1668年 毛皮交易にジェームズ湾ルートが加わる。 1668年 ハドソン湾会社がルパート川にチャールズ・フォートを開設。 1673年 ハドソン湾会社がムース川にムース・ファクトリーを開設。 1675年 ハドソン湾会社がフォート・オールバニー川にオールバニーを開設。 1682年 ハドソン湾会社がヘイズ川にヨーク・ファクトリーを開設。 1685年 ハドソン湾会社がセブン川にチャール・フォートを開設。 1694-1720年 クリー人はチペワヤン人やビーバー人を西方へ追いやる。	17世紀以降 1608-1630年 清朝(中国)でクワロンが流行。 イギリス、フランス、オランダのコロニーがアメリカ東北部にできる。 1670年 ハドソン湾会社(HBC)が設立される。 1685年以降 ビーバー・フェルト帽製造の中心地はフランスからイギリスへと移行。 1689年 中国とロシアの間でネルチンスク条約が結ばれる。 17世紀末 ロシアは毛皮市場を中国やそれ以外のアジアへ求めた。 1696年 毛皮市場が崩壊。	
1700年	18世紀 1730-1740年代 1741年 1740-1780年代 1750年代 1760-1767年 1763年 1766年 1781年 1784-1788年 1786年 1787年 1788年 1788年 1789年 1789年 1790年 1791年 1790年代後半 1798年 1799年 1799年	ロシアから中国への交易品はテン皮からラッコ皮に変化する。 ロシア人が千島列島とアリューシャン列島を探索。 ベーリングの第二次探検隊がアラスカ及び北米北西海岸へ至る。ベーリング隊がコマンドルスキー諸島でラッコを発見。 ロシア人による資源掠奪の時代。 ロシア人による資源掠奪の時代。 ロシア人の交易者はアリューシャン列島へ移動。 オットセイは不馴。 ロシア人がコディアク島まで進出。 ロシア政府はアリューシャン人をロシア臣民であると宣言。 ジュレホフ商會が設立される。 ジュレホフがコディアク島に到達し、先住民との平和な取引関係を作り出す。 オットセイの繁殖地であるプリピロフ諸島を発見。オットセイ猟が再興。 ロシアがスリー・セイント・ペイを植民地とする。 エカテリーナ2世によるアラスカでのヤサクの徴税の廃止。 ロシアとチュクチ人との間に和平条約が成立。 コリマ河沿いに交易のためのアンニウイ交易所が設立される。 アリューシャン列島付近からラッコがいなくなる。ロシア人は北米北西海岸進出を金で。ピリングス調査隊がアリューシャン列島を調査。 マラスピナ調査隊がチュカチを調査。 ロシア正教の宣教師がアラスカ南西地域に到来。 ロシア人のアメリカ商會(The United American Company)が許可される。 アメリカ商會は露米会社になる。 バラフがシトカに基地をつくる。	1774年 スペイン船サンチャゴ号がハイダ人のグループと接触し、交易を行う。 クック船長がヌートカ湾に上陸。何枚かのラッコ皮を入手。 1779年 ラッコの毛皮が中国の広東で高値で売れる。 海洋交易期。 1785年 ラッコ号が毛皮交易のためヌートカ湾に到来。 1788年 ボストンのグレイ船長が北米北西海岸へ来る。 1792-1812年 海洋交易の全盛期。 A. マッケンジーがロッキー山脈を越えて北西海岸へ到達。 1793年	18世紀、19世紀 毛皮交易の前提が西進。 1715年 ハドソン湾会社が西進してアサバカ川に到達。 1717年 ハドソン湾会社がフォート・チャーチルを開設。 18世紀後半 毛皮交易がサスカチュワン、マッケンジー流域にまで広がる。 18世紀半ば以降 1756-1763年 七年戦争(フレンチ・インディアン戦争)。 1760年 イギリスがデューク市を占領。 1763年頃 毛皮交易は、西はロッキー山脈、北は北西海岸のグレート・スレーブ湖やグレート・ベア湖まで広がっていった。 1779年 スコットランド人によって北西会社(North West Company)ができる。	1717年 ハドソン湾西岸のチャーチルにハドソン湾会社の交易所が開設。 1713-1756年 フランスは先住民との同盟を強化し、ニューオーリンズやピッツバーグを創る。 1713年 ユトレヒト条約のため、ハドソン湾はイギリスのものに。 1718年 ニューオーリンズにフランス人が商業センターを創る。 1727年 中国とロシアの間でキョフタ条約が結ばれる。 1756-1763年 フレンチ・インディアン戦争(七年戦争)。 1763-1821年 ハドソン湾会社とモンリオールの毛皮商人(ノー・ウエスターズ、後には北西社)が競合。 1763年 パリ条約でフランスはカナダをイギリスに、ミズーリ河上流域をスペインにわたす。 アメリカ独立。 1776年 米国と英領北アメリカの境界決定。 1783年	
1800年	1802年 1802年 1804年 1808年 1820年代 1833年 1838年 1839年 1841年 1847年 1848年まで 1850年頃 1854年まで 1867年 1867年 1880, 1890年代 1889-1906年	シトカでトリンギット人とロシア人とが武力衝突。 露米会社に第2番目の憲章が付与される。 バラフはコディアク島で米商船と交易し、米国との商業ルートをつくる。 シトカにロシアの総督府が置かれる。 アリューシの半地下式家屋の大型化。ベーリング海峡のチュクチ人はアンニウイ交易よりもアメリカ人との交易に目を向け始める。 セント・マイケル交易所が開設される。 ロシアはハドソン湾会社から植民地に必要な物資の供給を得る。 ハドソン湾会社はMt. Fairweather から Portland Canal までの沿岸地をロシアへ貸与。 ホルマコフに交易所が開設される。 ハドソン湾会社がフォート・ユコンに交易所をつくる。 アメリカ人はチュクチ海で捕鯨を行う。 ベーリング海峡北域に米国の捕鯨船が進出。 アメリカ人はボイト・パロー地域で捕鯨を行う。 アラスカ商會(The Alaska Commercial Company)が露米会社の交易所を引き継ぐ。 アラスカが米領になる。 露とセイウチの頭数が北太平洋で減少、アメリカ人は先住民を相手に毛皮交易を開始。 ハーシェル島海域でアメリカ人が捕鯨を行う。	1803年までに イギリス船が来なくなる。 1805年 北西会社の毛皮商人がロッキー山脈の西側に交易所を創った。 1821年 北西会社とハドソン湾会社の合併。陸上交易の開始。 1830年頃 北西海岸でラッコがいなくなると交易は島民から陸地民へと移行。 1830年代 ハドソン湾会社は交易船を北西海岸の南北へ走らせた。 1831年 ナス河の河口にフォート・シンズンができる。 1840年代 ラッコがほとんどいなくなる。 1840年代- 内陸交易の開始。 1843年 ハドソン湾会社はバンクーバー島にフォート・ヴィクトリアを開設。 1846年 イギリスとアメリカの間でオレゴン条約が結ばれ、バンクーバー島がイギリス領になる。 1849年 バンクーバー島北部のフォート・ルパートにハドソン湾会社(HBC)の交易所が開設される。 1849年 イギリス政府はバンクーバー島をハドソン湾会社の植民地とする。	1821年 ハドソン湾会社と北西会社が併合する。 1825年 ビーバーの毛皮からバフ・フォア皮へと交易の中心が変化。 1837年 グレート・ホエール・リバーにハドソン湾会社の交易所が開設される。 1850年以降 カナダ極北にスコットランド人の捕鯨者が基地を創る。 1910-1920年代 カナダの極北地域にハドソン湾会社の交易所が多数開設される。毛皮交易の開始。 1960年代以降 アザランの毛皮も交易されるようになる。	1800-1825年 ロシアはキョフタ交易に関心を失なう一方、アムール河流域への関心を高める。 アメリカにおける毛皮商業の拡大。 19世紀初め ビーバーから中国向けのラッコやオットセイへと交易の毛皮が代わる。 19世紀初め シトカハットの出現。 1808年 ジョン・キョブ・アスターがアメリカ毛皮商會(American Fur Company)を設立。 1809年 シュト一家がセント・ルイス・ミズーリ毛皮商會(St. Louis Missouri Fur Company)を設立。 1816年 アメリカ商會はイギリスの交易人を米国から締め出す法を施行。 1840年代 国際的な毛皮交易が衰退。 1867年 ロシアがアラスカをアメリカに売る。カナダ自治領の成立。 1869年 ハドソン湾会社は領地をカナダ政府へ売る。	
1900年						